339
835

始

雉と鳴の獵法

339-835

法獵の鳴と雉

他山獵夫

根岸盛太郎翁校閲

吉澤寛夫著

大正
5. 11.28
内交

斯民之福

音 罕必古

序

同好の士、吉澤氏其の著はす所の狩獵書を携へて來つて徵するに序を以てす、之を一讀するに雉、鳴を始めとして日本の獵鳥各種に就て叙述すること甚だ詳かなり、從來狩獵の書少からずと雖も多くは唯だ概括的の記事に止まり若くは獵銃の種類及び火藥等の事に偏し、未だ本邦獵鳥の各種に渉りて之を詳說するものあらざりしを遺憾とせしが、吉澤氏の此書たる百尺竿頭更に一歩を進め本邦に於ける獵鳥の種類を列擧するは勿論、其棲息の箇所蕃殖及び分布の狀態に就て詳細に之を說明し、更に進んで各種獵鳥の飛翔力及び之に對する散彈の狙越等に至るまで、研究的

に而かも平易に之を説明せる如き、最も出色の點にして啻に初歩の狩獵家に對する好指鍼たるのみならず、老練なる狩獵家に對しても參考に資する所少きに非ざるべし、想ふに此書素沽らん哉沽哉の爲に著はせるものにあらざるべしと雖も、狩獵家の爲には買はん哉買哉の書たるを失はず、書一たび出づるの後忽にして狩獵家の射獲に遭はんことを疑はざるなり、一言以て序と爲す云爾

大正丙辰の秋

清崟太郎

告白

先輩の書かれました狩獵の書籍は澤山御座りますが、多くは普通一般のことを書かれました本で、日本の狩獵に就て詳しく説明して下すつた本はまだありませんのです、で今では獵界の智識は餘程進んで居ります、曾て二三の獵友の集まつた間口よりは奥行のある本を望んで居ります、時に此話が出まして、私に執筆を慫慂められましたので、銃彈と同じ様な向見ずの私は臆面もなく其氣になつたので御座ります、

稿を草するに當りましては獵話會、獵友會其他斯道の先輩より多大の同

情を以て援助して被下まして漸く脱稿することになりましたので深く感謝致します、殊に獵界の耆宿根岸翁は粗笨なる原稿を一々訂正の勞を取つて被下れて完成したことを謝辭に換へ告白して置きます

丙辰の新秋初雁の聲を聽いて

吉澤士口識す

目次

□總論……(一)
日本の獵鳥……(二)獲物の發見と最終の勝利……(四)銃の撰擇……(八)火藥と散彈……(三)飛鳥と狙越……(二九)軍銃と狙越……(三五)狩獵と精神修養……(三七)
□雉、鶉雉獵の卷……(四〇)
日本の雉と鶉雉……(四〇)獵鳥としての雉、鶉雉……(四二)
□雉の部……(四三)
雉の產卵季……(四三)二番子と三番子……(四五)雉の減少……(四六)
人と鷹に對し……(四八)餌啄の場所……(四九)棲息と遊場……(五〇)雉の塒……(五二)雉の搜索……(五三)射擊の準備……(五四)散彈の撰擇

……(五五)雉の狙撃……(五七)初矢を外した時……(五八)鳥を拾ふ時の注意……(五九)鳥の保存法……(六〇)道案内と辨當……(六一)
□鶉雉の部……(六二)
鶉雉の產卵季……(六四)鶉雉の居る所……(六五)鶉雉の餌啄…(六七)
射撃の準備……(六七)鶉雉の飛翔力……(六九)
□雉、鶉雉の飼育法……(七二)
□鶉獵の卷……(八〇)
日本名鳥の一……(八一)鶉の蕃殖地と分布……(八一)鶉の搜索法…
鶉の狙越し……(八六)
□鶉の飼育法……(八七)
鶉の飼育法……(八七)卵の孵化……(九二)雛の保育……(九四)鶉の蕃殖力……(九六)
□鳴獵の卷……(一〇〇)
本邦に於ける鳴……(一〇一)鳴の分布の狀態……(一〇一)各地に渡來の期……(一〇三)鳴打の獵裝……(一〇四) 鳴獵と犬の使用……(一〇六)
鳴の性質……(一〇七) 本邦第一の棲息所…(一〇九) 鳴の食物…(一一〇)
餌の發生する場所……(一一一)鳴の居る所……(一一二)鳴の夜と晝…
…(一一四)田、沼の乾上つた時……(一一六)鳴の棲息所の判斷(一一七)銃を構へて……(一一九)風のある時……(一二三) 風上よりの說…(一二三)
風下よりの說……(一二三)射距離外より飛出した時…(一二四)飛び去つた鳴を追ふ說……(一二四)順を追ふて撃つ說……(一二六)再三追はれた鳴……(一二七)晴天には動作が鈍い……(一二七)克明に搜せ……
(一二八)居鳥の發見……(一二九) 飛鳥の狙撃……(一三一)鳥を拾ふこと
……(一三三)鳥の保存法……(一三六)野に立つての注意……(一三七)

□山鷸獵の卷……(一三九)
山鷸の生活狀態……(一四〇)山鷸獵の愉快……(一四三)山鷸の一度着いた所(一四三)地鳴とたましぎ……(一四五)
□獵犬の卷……(一四七)
ポインターとセッター(一四八)獵犬の資格……(一五〇)獵犬として無資格……(一五二)訓練の効を積め……(一五三)獲物の運搬……(一五六)齒の固い犬……(一五八)銃聲を恐怖する犬……(一五九)犬の系統と遺傳……(一六〇)主人の勞と犬の活動……(一六三)命令の遵守(一六三)犬の訓練と心理狀態……(一六四)

雉と鳴の獵法

總論

日本の獵鳥

本邦に於ける獵鳥としては雉、鷄雉、鶉、雁、鴨、鳴、山鷸、鷸秧鷄と其他種類は決して少なくないが、狩獵を趣味のものとしての獵鳥には雉、鷄雉、鶉、鳴、山鷸の類であつて、其他は趣味のものとしては獵鳥の價値を認めることが出來ない。

雁、鴨の如き獲物は大きい丈けに愉快は愉快であるが偶然僥倖の獲物で

あつて狩獵の趣味としては殆んど零である、努力の供ふ處には愉快も存するのである雉、鳴の如きは其の居る所は豫め判定することが出來る、自分の判定に依て鳥を追ひ出し、之を狙撃して鳥が落ちる、其處には云ふべからざる面白味がある、其判定の誤まりないと云ふことは誇りとすべきことで其の鳥がうまく當つて落ちる處などは決して單調なる娯みではなく自分の深い研究と熱心なる練習の効果である、殊に犬を使用する雉、鶉の獵に至つては我が手鹽にかけた愛犬の動作を見ると云ふことも中々興味のあるもので又一つの趣味を益す譯である。

狩獵に趣味の存する處は氣候、地勢、地味、附近の狀態等に依つて、獲物

の所在を判定し、之に豫告を與へて追ひ出し其飛び出した處を撃つにあるので之によく適合した獵鳥は本邦では鳴、山鷄、鷸、雉、鶉、鶉の類であつて鳴、山鷄、秧鷄は候鳥であるも、雉、鷸雉、鶉の類は我國に蕃殖して其の數も少なくないので我國に於ける好個の獵鳥である。

雉、鷸雉は東部亞細亞の特産物であつて歐洲、米國等には棲息しないので歐米狩獵家の羨望措かざる處である然るに年々東洋より移殖した結果今では家禽的に養成して立派に獵鳥になつて居る、其外歐洲各國の獵鳥としてはパートリジ、グラウス、鶉等で、鳴、山鷄の類は歐洲諸國にも渡つて獵鳥として歓迎されて居る、歐米各國では賞翫措かざる處の雉、雉は

我國では天與の特産物として到る處に蕃殖して居るので本邦の狩獵家には大なる幸福である我國で獵鳥として數に於て多いのは鳴、雉、鷄雉、鶉で之に續ては山鷄、鷄の類である、今之等獵鳥の生活の模樣、搜索の方法、射擊等を詳細に記して見よう。

獲物の發見と最終の勝利

狩獵の勝利としては射擊の巧拙にも依るが、最終の勝利は獲物を迅速に且つ巧に發見するに歸着する、射壇に於ての射擊はクレーでも放鳥でも放つ處は一定して居るので、細心の注意さへ拂へば決して困難なるものでないが狩獵は射壇に於ける射擊の如く單純のものでない、射擊とは全く別物であつて獲物の出づるや千差萬別であつて、如何なるスクラッチを以てしても狩獵としての練習する處がなければ決して勝を制ることが出來ない、獲物に多く遭遇する程練習の機會も多くなる譯で從つて手腕も上達するのである、手腕の同等は勿論多少技倆が劣つて居つても獲物を發見すると多のい者には勝を制せらるゝ次第であれば狩獵家として最も大切なるものは獲物を多く發見することにある。

獲物を巧に且つ迅速に發見せんとするには先づ獲物の生活狀態を知悉することが最も肝要である、其生活狀態を知悉しないで獲物を發見せんとするは不覺も亦甚だしいもので、犬も歩行けば棒に當ると云ふから時に

は獲物が飛び出すことがあるかも知れないが其生活狀態を知悉して搜索したものでなければ偶然に獲物の居る處に遭遇したもので僥倖に過ぎないのである、多くの狩獵家殊に初心の狩獵家には雉は山に居るもの、鳴は水田に居るものと唯無暗矢鱈に山に行つては雉を搜し、鳴を打つと云ふては田の畔を歩行いて居る、之は萬一を僥倖するものであつて勞のみ多くして報酬の少ない其愚哀れむべきものである、狩獵をなさんとするには先づ獲物の生活狀態を研究してこそ始めて獲物の居る處を知得することが出來る、狩獵をなすには先づ獲物の所在を知るのが最大急務である、犬を使用するの獲にあつて獲物の所在を知らずして濫に犬を使用する

る時は唯犬に徒勞のみさせて犬の技倆を練磨することがないので如何なる良犬であつても次第に退歩して駄犬にも劣る物になる、獲物の所在を知つて犬を使役してこそ犬も知遇を得て益々熟達するが、然るに自分が獲物の所在を知らないで犬に依つて獲物を發見せんとするのは無定見である、で獲物の發見せざるを犬の罪に歸して打擲し甚だしきは獵場に於て犬を打ち殺したと云ふ乱暴者も居る、之等は犬を使役することを知らざると共に狩獵の何たるを解せざるもので狩獵家としての價値のない人である、犬を使役する前に先づ獲物の所在、棲息所であるか否かを識別するだけの智識は勿論必要である。

凡の事柄に豫備の智識が必要である狩獵の豫備智識としては銃の操法、射撃の練習のみと心得て居るものもあるが、狩獵の豫備としては之許りではない、獲物の生活狀態、搜索の方法、犬の使用法等を研究するのは狩獵の豫備として最も必要なる知識である。

銃の撰擇

狩獵として銃の撰擇も等閑に附するとの出來ない問題である、一秒間に三百五十米突と云ふ速力を出すだけに銃に於ける微妙の欠點も命中の上に大なる關係を生じて來る昔武士は刀を撰んだと同樣狩獵家は銃の撰擇を愼重にする必要がある、銃の構造、優劣等の說明は先輩の敎書に盡されてあればこれは省畧するとして撰擇に執て必要なる條項を記して見よふ

一、日本人の體格に相應したる銃
二、日本の獵鳥に適する銃の口徑
三、左右上下に散開して前後の散開の間隔の少き銃
四、散開の疎密の平均したる銃
五、銃の重量が疲勞を感せしめざる銃
六、ベント、キヤストオフ及び銃臺の長短が自身に適合したる銃

（一）日本人の體格に相應したる銃

銃の發射に際して反動のあることは諸士の既に了知せらるゝ處であるが

反動の強い爲に命中を防げる等の場合がある其の反動と銃の重量とは反比例をなして居つて反動の少ないのは銃が重い銃の輕い物は反動が強い銃を終日擔つても疲勞を來たさない物で充分に反動に堪へらるゝもので なければならぬ。

日本人の體格に適合したる銃の重量としては八百匁位を限度として之以上少しにても增すと甚だしく疲勞を感じて來る十匁十五匁と僅かの差でも終日使用して居る間には著しく影響して狙撃をする場合に動搖して容易に狙が定まらず遂に好機會を逸することになる。

輕過ぎれば非常に反動を强くして命中を欠き甚だしきは肩骨を打つて疼痛を起し暫くの間は銃を肩にすることが出來なくなることもある其の反動は銃の輕い爲めのみでなく、火藥を多くした時にも反動が强くなる、遠距離に有効ならしむる爲に火藥を多くする等のことが往々あるが却つて反動を强くして命中を欠く許りでなく甚だしきは銃身までも損ずる故火藥、散彈の定量を越すことは絶對に禁じなければならぬ。

日本人に對して重量、反動の充分堪へ得る口徑は十二番、十六番口徑である、十二番以上では非常に重量を增し反動も强く日本人の體格には無理である、十二番十六番口徑は日本許りでなく廣く世界の獵銃として第一位を占めて居つて、獵銃と云へば殆んど十二番か十六番を意味したる

かの如くである、夫れ以上若しくは夫れ以下にあつては特殊の獵に使用されてある。

（二）日本の獵鳥に對する口徑

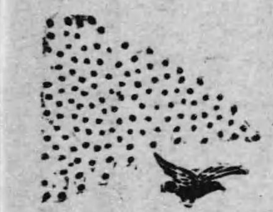
獵は主であつて銃は從であれば、日本人の體格に十二番、十六番口徑が適して居つても、果して十二番十六番口徑が獵鳥に適して居るが、日本の獵鳥としては既に記した如く鳴、雉が主であつて、雁、鴨の如きは大に八番口徑の必要を感ずるも獵鳥として搜すとは少なく多くは其の飛び來るを擊つの僥倖的の獵であつて銃を携帶して獵する場合が少ないので携帶銃としては大口徑の必要を認めない。

主たる獵鳥の鳴、雉は其大さ飛び出しの距離等に於て十二番十六番口徑が最も適應したる銃で之等以下の口徑にては散開の面積が少なく、射距離も近い、又十番以上の口徑になると、散開の面積が多少廣くなるが、銃の重量が重く携帶に不便且つ徒に疲勞する許りで其の効力が少ない日本の獵鳥としての獵銃は十二番、十六番口徑か最も適當である。

（三）左右上下に散開して前後の散開の間隔の少なき銃

散彈は左右上下に散開する許りでなく前後にも散開する發射に際して銃口内に於て銃身に添ひたる部分は銃身との磨擦の爲に著しく速力を殺が

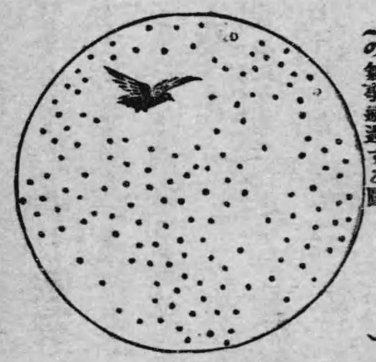
れて、中央は凸出して圓錐形に散開を爲して進んで、扨して左右上下に平面にのみ散開して進むものでない、絞り銃は絞りの處に於て一層速力を殺がるゝので前後の間隔も一層甚だしくなる、前後の間隔が甚しいと好獲物を逸することになる、尖頭は其の距離に達し其散開圏内に獲物が居つても其の周圍の彈が達しないで、首尾よく其處を通過するので、彈は左右上下に開いても前後の短かい、なるたけ平面に散開することを要する。



前後の間隔の甚しい爲め獲物が散開圏内を無事通過する圖

(四) 散開の疎密の平均したる銃

二十米突で三尺に散開しても散開が一方に疎で一方に密であることは命中の上に大なる關係がある、上圖の如く一方に密なる處があれば一方には必ず疎なる處があつて鳥は散彈の散開圏内に入つても疎なる所に居れば一彈の見舞も受けないで通過することになるので、散彈が斯る疎密のない網の目の樣に平均に散開することを要する、其の網の目の樣に散開するのを散彈網と稱へてある前後に著しく間隔を生じ若くは著しく疎



散開の疎密の甚だしき爲め獲物の無事通過する圖

密を生ずるのは銃口の穿鑿の如何に原因することが多い、例合て見ると銃口内に於て極て微なる凹所があつも之が爲に摩擦を起して散開の上に大なる前後疎密を出顯するものである故購入者は充分に試驗を行ふことを要する。

今迄記し來つた處は銃一般の撰擇法であるが使用者其人に對しての撰擇は下記の如くである。

（五）銃の重量が疲勞を感ぜしめざること

昔武士は刀を帶ぶるに際して先づ百回振り廻して疲の出ない物を撰んだと云ふことである、百回振り廻して疲を覺ねるようでは如何に業物であつても長い立合の間に刀の爲に疲が出て失敗を招ぐからである、銃を撰擇するにも先づ自分の體力に相應した終日携へても疲の出ない物を擇むのが必要である、銃を持つて疲が出來る樣では狙ふ時に手が動搖して狙が定まらない從て當るものでない。

（六）ベンドにキャストオフ

人々の體格は同一ではない首の長い人、短かい人、肩の張つて居る人、肩の痩けて居る人、若くは脊の高い人、低い人乃至は腕の短かい、長い者も皆同一の銃を使用して同一の効果を收め樣ふとするのは無理なる注文である。

異なる其の骨格に銃を適應せしむるには凡て銃臺に依つて按配さるゝのである。

銃身に銃臺は眞直には附て居らない、銃身に對して、銃臺は右に歪がんで居る、之はキャストオフで、又後に曲つて居る、之はベント(曲度)である。

首の短い人、肩の張つて居る人に對してベントの深い銃は、狙ふ時に銃身か上り過ぐり爲銃口のみを下げて狙ふ故自然に下を打つことになる又首の長い人、肩の痩けて居る人がベンドの淺い銃を持つときは銃身が下り過る爲之は又自然に銃口のみを上げる故に、狙點の上を打つことになる、

視線は樋鐵に併行して照星と狙點と一線上にあつて始めて彈は狙點に達するものである、ベンドの深淺が射手に對して度を過ぐるときは銃口のみを上下して狙ふことになる故狙點の上下を打つことになる、之は要するに首の長い人、肩の痩けて居る人はベンドの深い銃、首の短い人、肩の張つて居る人はベンドの淺い銃を持ては視線は樋鐵に併行して照星と狙點と一線上にあることを容易ならしむるのである。

キャストオフは、銃身と銃臺との接合の所に於て右に少しく曲つて居ることは既記の如くであるが、若し銃身と銃臺が眞直に接合してあるときは、視線は樋鐵に併行して照星と狙點と一線上にあらしむるには首を右

に非常に傾むけなければ狙が附かない、急速の場合には銃口を左にして狙ふ故狙點の左を打つことになる、從つてキャストオフの度が強ければ之又其の反對に右を打つことになる、日本人に對してのキャストオフの律は一吋八分の三としてある。

又腕の長短は銃臺の長短に大なる關係を有する、腕の長い人が銃臺の短い銃を持てば銃口が上り其反對に腕の短い人が長い銃臺を持てば自然に銃口が下になつて下を擊つことになる故腕の長短に依つて銃臺の長短にも注意しなければならぬ。

ベンドは上下を按配し、キャストオフは左右を按配して、視線は樋鐵と併行して照星と狙點とを一線上にあることを容易ならしむる爲であれば充分に自身の體格に適合したる物を撰擇することが最も必要である、此撰擇を誤るときは大に命中の率を減ずるものである、然し初心者にあつては容易に知ることが出來ない、之を先輩か若くは信用ある銃砲店に質すのが安全である。

火藥と散彈

火藥の種類に附ては既に定評あれば茲には極めて簡單に記し置く。

散彈の初速は三百五十米突としてあるが、其の初速を增加する程速力が速くなつて從つて狙越が少なくなつて、命中が確實になる譯である、其

の初速を高むるには火藥の量を增して瓦斯の發生を多くして壓力を增すこと、火藥を藥室より銃口までの間に燃燒せしむることにある、然し瓦斯の發生の量を多くして壓力を增すことは銃身の對抗力に大なる關係があれば最も愼重の取扱を要する。

火藥の壓力は前方許りでなく、後方も左右も同樣なる壓力である、此壓力に對する銃の抵抗力は英佛の製銃は七百瓩を最低限度とし、安全の最大限度は其四分の三即ち五百二十五凡としてある、其安全限度の各種火藥の定量及び散彈の量を示せば

		タイヤモンド		N N 印		黑色火藥	
	藥量	散彈量	藥量	散彈量	藥量	散彈量	藥量	散彈量
四番徑							自四匁至六匁	三十匁
八番徑	一匁三分十五匁	一匁〇二	七分四六分四	十匁八九匁四	四番徑は八番口徑にあてはNN印は反動強故注て黑色火藥をよしとす		自三匁至四匁	十五匁
十番徑	長ケース 九分五 直ケース 八分三	十一匁三九匁四	七分二八分二	十匁六十匁六			自二匁至二匁四	十二匁
十二番徑	長ケース 八分八 七ケ九分一 煙山島 七匁四八匁五	十一匁三九匁四八匁五	七分一六分一五分六	十匁八九匁四七匁五	強藥 プロー ニング 藥	十匁〇十匁〇九匁五	煙山島 一匁六 一匁七	九匁五十匁
十六番徑	六分八	八匁五	五分二	七匁五	五分六	八匁	一匁三	八匁
二十番徑	五分六	六匁	四分二	六匁六	五分	六匁	九分	五匁
二十四番徑	四分五	五匁一	三分七	四匁七	四分五	五匁	八	四匁六
二十八番徑	四分	四匁七	三分四	四匁一	四分一	四匁	七分	四匁二

〔右の表は英國の試驗を受けし銃身の定量である故內地製の銃身に對しては今少し量を減じて使用するのが安全である〕

此の定量は英佛等の抵抗試驗を經たる銃であれば、抵抗試驗を經ざる銃に對しては火藥の增量は最も危險である、本邦製銃に對しはてNN印火藥、二瓦七、彈量三十二瓦で壓力は四百瓩を定量としてある。

安全を保持する爲に四分の一、百七十五瓩の差を措いてあるので各射手は特殊の獲物に對して少量は增加することが出來るが、定量の四分の一を增加すれば銃身の抵抗力がなくなつて銃が破裂する譯であれば、少なくも多少の安全を取つて置なければならんので八分の一乃至七分の一以上を增すことは最も危險である。

速力を增加する爲に火藥を多くしたる場合に如何なる結果を來たすかと云ふに、其の速力の迅速なるだけに彈と彈との間に衝突を來して、散開に著しく疎密を來たし、且つ前後の間隔が甚しくなる。

速力としては銃口を出づる瞬間に最高速力を出すのが最も有効である、で銃口を出づる瞬間に最高速力を出さしむるには火藥をして散彈が銃口を出づるまでに遲速なく全部燃燒し盡すのが必要である、火藥が銃身の中途に於て燃燒し盡す時には其時が散彈が最高速力を出した時で銃口を出る時には大に速力を減じて居る。

初速を出さしむる爲に裝塡に際して强き壓力を加ふる人があるが、之が爲に燃燒を早くして中途に燃燒し盡して著しき反動を感ずることがある

其反動の強いので、如何にも高速力を出した樣に思はるが、之は反動の強い許りで反つて速力は減じて居る。

又強き壓力を加へた結果火藥の粒を碎いて爲に燃燒を速かならしむる事もある、裝塡に際して強度の壓力は反動を強くし速力を減ずるものであると同時に壓力の足らない時にはまた速力を減ずる故裝塡には細密の注意を要するのである。

散彈の撰擇は等閑に附せられてあるが然し決して注意を怠る可きものではない、粒に大小のあるのは散開に疎密を來し、また前後の間隔も甚しくなる、又粒の柔かなのは散彈か互に衝突を來す際に歪み且つ空氣の抵抗に逢ふても形を變ずるもので著しく其速力減ずる故、硬度の強く粒の揃ふて居る物を撰擇する。

散彈の大小は銃口に於ては速力には關係ないが距離の遠ざかるに從ひ別表の如く彈の小なる程其速力が減少して行く、從つて重量のある散彈程遠距離に有効であるが、散彈の大くなるに連れて散開網は疎になる譯で散開網が疎になれば小い鳥は其間を取り拔けて了ふ、又命中彈は一發よりも二發が有効、二發よりも三發が有効である、で鳥に對しての散開網は一羽の鳥に對して二發乃至三發としてある、一羽に對して三發以上の散彈になる時は散開の平面積を小くして其効力を少なくする。

散彈の種類	一粒の重量	銃口より出でたる速力	三十米突に於ける速力	三十米突に於ける侵徹力
二號彈	〇三五〇	三五〇米	二三二米	九、六
六號彈	〇一六二	三五〇	二〇七	三、六
十號彈	〇〇六五	三五〇	一四六	〇、七

散開網の平面積を大くせん爲に散彈の量を定量以上に多くする人がある、が之は徒に反動を強くし初速を減ずるのみで其効力は少ない。

各獲物に對して最も有効の散彈は

小鳥類	十二號	十一號	
鳴、鶉	十一號	九號	
山鷸、鷸	十號	八號	
雉、鷄雉	六號	四號	
兎	四號	二號	
鳴	二號	B B	
雁	B B	以上	

飛鳥と狙越

狩獵としての眞の趣味は飛鳥を狙を誤またず撃ち落したる瞬間にある、此瞬間こそ實に娯の絶頂に達した時で、其の娯みの深い程狙撃が困難である、實際に飛鳥の狙撃は決して容易のものでない、散彈の速力は初速

に於て一秒時間に三百五十米突即ち百九十五間三尺で、次第に速力を減して銃口より卅米突、即ち十六間三尺の處では散彈の大小に應じて二號彈で百二十七間三尺より、十號彈で八十間一尺の速力になつて居る。雉打ちの五號彈では十六間三尺の處で百十九間二尺の速力である、之を初速百九十五間三尺と平均するときは一秒時間百五十七間二尺餘の速力で十六間三尺の處まで飛んで行くことになる、然るに雉は一秒時間に二十米突即ち十一間の速力で飛ぶ、詰り散彈の約十四分の一の速力で飛び去るので散彈が十六間半の處に達する時には雉は七尺二寸先を飛んで居る次第である、十六間三尺の距離で現在鳥の居る處を狙つて撃ば散彈の

狙點に達した時には鳥は既に七尺先を飛んで居る事になるので鳥に命中せんとするには鳥の現在居る處より七尺先を狙つて始めて鳥が散開圏内の中央に來て命中する譯である、散開の巾を三尺とすれば狙越を五尺七寸に減じても鳥は散開圏内に入つて命中することになる、從つて狙越を一尺五寸伸して八尺七寸の先を狙つても猶命中する次第であれば少なきに失するよりも多きに失した方は安全である。

鶉雉の如き一秒時間に廿五米突以上の高速力を有して居る鳥は彈が卅米突の處に達する時には既に一間二尺七寸も先に行つて居るので一層多く狙越しの必要を生ずるのである、然し實際に於ては雉鶉雉に對して正確

に七尺二寸、一間三尺と狙を定むることは不可能の話であつて、正確に狙を定めて居る間には鳥はヅン〳〵先に飛んで決して狙を定むることは出來るものでない、又射手の狙定の巧拙、引鐵を引く時間の遲速等に依て猶以上の狙越を要する次第であつて決して正確に定むることは出來るものでない、鳥を狙らふと云ふよりは彈の飛ぶ先に鳥が來て彈に當ると云ふ觀念で發射するがよい、そうするには是非共先を擊たなければならぬ、其の狙點は先づ初めに鳥の前面二三尺の所に置て、鳥の速力に應じて狙を先方に進めながら發射するのである、又三十米突以上の距離に對しては之に準じて狙越を伸し以下にあつては狙越を縮めて發射するのである。

鳥の飛び出したる距離、其速力に應じて狙越を伸縮長短すると云ふことは狩獵家としては最も大切なことで又最も困難なることで、機敏なる動作と練習の効とを積んで初めて出來るので、熟練なる射手になると鳥に直接に狙つても引鐵を引く瞬間に於て距離、飛翔力に應じて自然に狙越をして發射するもので、自分には殆んど不知覺先天的に斯かる微妙の動作をするのである現在に飛鳥に對する狙擊の方法として一般狩獵家に行はれてあるのは

一、鳥に直付けに發射すること

二、鳥を狙つて發射する時に狙越しすること
三、鳥の前方を狙ひつゝ發射すること
四、鳥の飛ぶ方向と速力とを豫測して鳥の或る點まで來た時に發射すること

第一の場合は鳥が最も近距離に顯はれて少しの狙越しも要せず其鳥を突くが如に狙つて直に發射するのである。

第二は少しく距離のある所に顯れて狙越を要する時に最初鳥を狙つて發射する瞬間に少しく持ち越して發射するのである。

第三は鳥と自分の距離に應じて前方を狙ひ越しつゝ發射するのである

第四は鳥と自分の距離及び鳥の速力、方面等を豫定して發射するものでこれは障害物等があつて正確に鳥に狙を定むることの出來ない時に行ふ手段で最も熟練を要する。

以上四項中其の一を取つて滿足する樣では其奥技を解する者と云ふことが出來ない、場合に應じ各項に恒つて直覺的判斷を以て應用することを常に心掛くべきものである。

軍銃と狙起し

陸軍の步兵銃では銃口前二十五米突の速力は七百四十七米突である、獵銃の速力の二倍より猶四十七米突速い、其高速力で二百米突先を步行し

て居る敵に對しては〇米突四一、駈歩の歩兵は〇米突七〇、駈歩の乘馬兵は一米突四五（四尺七寸餘）を狙越して發射することになつて居る、又飛行機に對しては其速力の不明の時には飛行機の長さの二倍の處を狙ふことになつて居る。

最も速力の速なる軍銃にあつても行動するものに對しては此の如く狙越をして居る、軍銃の速力の二分の一以下の獵銃で、人の駈歩の速力に十倍する飛鳥を狙ふ場合には一層明確に狙越の必要なることが了解せらる飛鳥に對しての命中の率は狙越の正確と否とにある、初心の狩獵者にあつては其動作に於て敏捷を欠くの患もあるので、狙越は少なきに失する

よりも多きに失した方が失敗が少くない、頭部には一發でも直ぐ落つるが、尻の方には二三發でも猶落ちないことがある、頭部は致命傷であるが後部は致命傷にならない、凡ての場合に於て狙越を心持ち多くした方は利益である。

（二）狩獵と精神修養

一秒間に十八米突乃至二十六七米突の速力を有する飛鳥に對して正確に狙點を定むると云ふことは最も機敏なる動作を要する次第で少しでも遲疑する間に鳥はヅン〳〵飛んで射距離外に去つて了ふ爲に初心の狩獵家には鳥を見ると非常に焦つて射擊の機會を失ひ若しくは正確な狙が定ま

らないで惜たら獲物を逸することが少なくない、鳥を見て臆するのは確信のない證據である、充分に練習の効を積んで居れば鳥を見ても、そう臆しない、今一ッには精神修養の積まぬ爲である、鳥を擊ち度いと云ふ慾望は鳥を見ると必ず臆するものであれば少なくとも鳥に對しての慾望は去らなければならぬ、で操銃の技が巧になつて、早く狙を定めることが出來れば發射する場合に餘裕が生じて來る、發射に際して餘裕があれば精神も落附き、精神が落附けば狙も正確になつて來る譯である。

要するに狩獵の妙は飽く迄も虛心平氣の精神と臨機應變の熟技即ち五體の捌なしとを具へ突嗟の場合に自己の精神は彈丸となり、謂所氣合と共

に鳥に向つて達するのである、此の場合は何等の蟠りもなく無我の境に入るの時即ち奥儀の妙を解した秋である。

雉鶉雉の獵の卷

日本の雉と鶉雉

雉、鶉雉は好個の獵鳥であつて、東洋の特産物であることは既に記した通りであるが、種類としては其數が少なく世界を通じて僅かに廿五六種である、其内日本では内地の雉と鶉雉、朝鮮の高麗雉、臺灣の帝雉、臺灣雉、山鷄等である、内地の雉は全國を通じて同一であるが、鶉雉には普通物の外に九州に赤鶉雉、腰白鶉雉の二種が居る、赤鶉雉は時に關東地方にも居ることがある、朝鮮の高麗雉(球數掛)は對馬、五島等にも居る、

之は多分朝鮮より移殖したものであらふとの事である、臺灣の三種は臺灣にのみ居つて内地には棲息しない、殊に帝雉の如きは世界に於ける珍鳥である、北海道より樺太には雉、鶉雉は未だ蕃殖して居らない、北海道の松鳥と云ふのは毛色は鶉雉に似て居るので松鳥と云ふて居るが、雉鶉雉とは全く別物であつて雷鳥と同種である。

此他時々異なつた毛色の雉鶉、雉を見ることもあるが之は別種ではなく眞の毛變りであつて人間の白子と同一のものである、又雉、鶉雉は極く雜種の生れ易い鳥で雉、鶉雉の雜種などは珍くないが時には雉、鶉雉に鷄の雜種なども見ることがある、銀鷄鳥、金鷄鳥、尾長雉も雉の種屬で支

那の南部に居る。

獵鳥としての雉、鷭雉

雉、鷭雉は他の鳴、鶉の類に比して大きいのと、犬を入るれば直に飛び出すので獵鳥としては中々趣味の存する鳥で狩獵家には大に歡迎されてゐる。

狩獵としては犬を使役して其犬の巧妙なる動作を見るのは頗る趣味のあるものであるが、鳴獵には本邦目下の狩獵の狀態では、犬の使用は不必要であつて、獵として犬を使役し得るのは鷸秧鷄、山鴫、鶉、雉、鷭雉の類であるが山鴫の獵期の短いのと、鶉の小いのに比して雉、鷭雉の獵

期の長く鳥の大きいのは犬を使役して一層趣味を深くするのである。

雉の部

雉の產卵季

雉、鷭雉は北海道樺太を除いて臺灣より朝鮮、到る處に蕃殖して居つて同種屬に屬して居るも其生活の狀態は多少異なつて居るので雉と鷭雉は項を別にして記すことにする。

雉の產卵期は八十八夜前後である、交尾期が來ると雄の肉冠の色は鮮かになると共に羽毛も色澤を增して非常に立派な姿勢になつて、チツケンチツケンと啼いて雌を呼んで搜し、又雌はピウヨ〳〵と鳴いて雄を慕ひ

其啼聲を聞いて雄を尋ねて行き其時は雌も毛色の澤を增して來る、交尾の後雌は五六個乃至十個位を產卵し始めて卵を抱くが其巢は人家に近い處で通路より二三間を隔たつた小笹の中、茅藪ボサの中等枯草のあつて日當りのよい處、又畑の中でも一寸人目に着かない處等で巢を造る所は一定してない其の巢は地に少しの窪味を造り上は僅かに身を隱すだけの枯草を覆ひ極く疎雜なる巢を造つて產卵する、孵化の日數は種々の說があるが試驗的に飼育したる二年間の實見によると何れも二十四日目に孵化する、孵化後五六時間にして羽毛が乾けば親鳥は雛を連れ巢の外に出て餌を探すことを敎ふる七八十日位にして、黑毛が拔變り同時に雌雄の

別も判明し百五六十日にして成鳥の期に達するが、獵期の始めにあつてはよく一腹が纏つて居るが、其中には發育の後れてまた尾羽の出揃ざる物も居る。

二番子と三番子

比較的成長の遲いのを二番子三番子と唱へて居るが雉は抱卵しなければ二十位の卵を產むも實際に二番子、三番子であらふが、果して二番子、三番子とすれば雉の蕃殖は偉大のものである、恐くは一腹の子を成長させし後の腹ではなく交尾期の後れたもの若くは卵の孵化しなかつたもの又は孵化後間もなく雛が死んだ爲め雌に再び愛の乘つて後れて產卵した

ものであるとは眞に近い說雉ある。

雉の減少

雉は多くは耕作物のある田畑に近い處に棲息して居つて、餘り人家より離れた處には多くは居らないのは、彼の嗜食する食物は重に穀物であるからである。

其食物とする物は山にあつては椎、榧の實、零餘子、小虫等であるが、多くは耕作地に出でて陸稻、麥、粟、蕎麥、豆類より唐黍の類まで凡て人の食用に供する處の耕作物を彼は殆んど好んで餌啄をするので、彼は人家に遠ざかつては多くは生活しない、で農作物に對しては彼は非常に害

をなすので狩獵の今日の如く全盛ならざる時に於ては農家は非常に損害に苦しんだものである、其時代にあつては都會を一歩出れば澤山に居つて東京附近で僅か半日の獵でも相應の獲物があつたものである、然るに狩獵家の年々增加するのと、其技倆の熟達するに連れて非常に急劇に其數を減じて、今では東京附近一日位の行程の處では容易に見ることが出來なくなつたのである。

其の澤山居つた時代には搜索にも格別の勞力を要せず、駄犬でも容易に搜し得たものであるが、年々其の數が減少すると共に人の襲擊を恐れて容易に姿を見せざる樣になつたので愈々良犬の必要を切つに感ずると共

に人の技倆の熟達も要し、又非常に其の捜索にも困難を感ずる樣になつたのである。

人と鷹に對し

今云ふた如く年々人の壓迫を受るので、彼等は耕作物を嗜み餌啄しても容易に人に見出さるゝ處には棲息しない、耕作地には多少遠い處でも安全なる處を擇んで棲息するのである、又雉も鳴と同じ樣に鷹には非常に恐怖して居るので、餌啄をする附近に鷹と人に對して適當なる隱蔽物があれば其處に居るが、若し適當な隱蔽物がなければ遠方に棲息して朝夕二回耕作地に出で餌啄みをする。

餌啄の場所

雉は朝夕二回規律よく朝は午前八時頃と、午後は三四時頃とに必ず田畑に來て餌啄をする、朝の餌啄をした後は隱れ場のある日當りのよい處に居て砂浴又は休息して、午後三四時頃になつて再び耕作地に來て餌啄をする、其餌啄所は山に椎、榧の實、零餘子等のある所では雪の降るまでは山に棲息し又山に餌のない所は前に記した陸稻、麥、粟、蕎麥、豆類より唐黍の類殊に蕎麥は好んで食するので之等の穀類の耕作してある田畑に來て餌啄をする、又山でも耕作物のある處は如何なる深山でも又劇しい崖の處でも來て餌啄をする故深山の山腹などで嗜食する蕎麥等の蒔

てある附近には必ず棲息して居る故、出獵の際に斯かる塲所を發見したら必ず搜索して見る可きものである。

雉の遊び塲

朝餌啄をした後は鷄と同じ樣に羽虫の發生の多い鳥で絶ねず砂浴をするので餌啄をする塲所の附近に日當りのよい乾燥した茅、ボサ、小笹、草藪等の處で、人と鷹の目より隱るゝによい場所があれば其處に砂浴をして遊んで居る、常に日當りのよい處を撰んで午前は南、若しくは東に向つた處、午後は西日を受ける處に移つて居る、三四時過ぎになると再び餌啄をして多くは塒に去つて了ふ。

其餌啄をする附近に適當の隱塲がなければ二三丁乃至五六丁猶ほ遠くに飛んで隱れて居る、山に近い處では日當りのよい小な澤の中腹若しくは山の窪味の處に居つて砂浴をして居る。

又山に椎、榧の實、零餘子の澤山ある處では山に居つて餌啄をして、其附近の日當りのよい澤の中腹、窪味の茅の根、小藪の所に居つて砂浴をして居る、大きな森林、竹藪又は柴山等で陰欝の處には居らない、概して言へば陽氣な所を好む鳥で、野でも山でも日當りのよい陽氣な所で茅の株、小笹、ボサ等の處に居ると思ひば大差がない。

雉の塒とする處は一樣でない、餘りボサの深くない木の下に雉の糞が堆高くなつて居る處を見ることがある之は其木を彼が塒とした處である。

此の外猶塒としては又松の木、檜の木等の高い木にも止まれば又日當りのよい枯草、茅の根、ボサ乃至は畑の中なども塒として居つて一定してないのである。

雉の搜索

雉を搜す場合に於ても鳴と同樣に云ふことは出來ないが、山と畑の模樣を見て雉の有無を決するのが第一である、山に雉の餌となる椎、榧の實、零餘子等の澤山ある處には畑に降りないで山に餌啄し山が松林か雜木林であつて雉の傳こなる物のない處では必ず畑に降りて餌啄するものと判斷して犬を畑の餌啄の場所に入れて見て臭のある時が午前なれば附近の狀態に就て遠方から餌啄に來たか、將た附近のボサ、茅株、雜草等の中に居るかを判斷して犬を入れる、早やく判斷して犬を入れなければ犬は勝手に其附近を探し廻つて居る間に鳥は潛ぐつてヅン〳〵逃げて犬が臭を附けた時には遙に遠方に逃げて居る故、迅速に判斷して犬を使役することが肝心である、夕方に臭のあるは、多くは塒に去つた後で塒に就ては前に記した通りで附近の狀態に依つて塒を搜すのである、概說すれば午前は南東向きの場所、午後なれば西南向きの處餌啄の後なれ

ば塒に居るものとして搜索すべきものである。

射擊の準備

獵場に立つた時には自分の命令を嚴重に遵守せしめて、犬をして充分に活動せしむることが肝要である、自分の智識に依つて獲物の居る所を判斷して犬を入れて監視して居ると、犬は臭に就て八方搜索し廻つて獲物を發見すると犬の種類に依つてポイント若しくはセットして獲物の發見を報告する、射子は其時は地勢に依つて獲物の飛去る可き方向を判斷して體を極め十二分に心を落ち着けて所謂臍下丹田である、此時に臆する樣では決して當らない、普通の場合に山なれば奥へ〳〵と飛ぶもので人

家の方へは飛ばない、其他の場所でも開豁したる處には飛ばないで早く身を隱すことの出來る方向に飛ぶものである、其の飛ぶ方向を判斷し充分に準備をして始めて犬に號令を下すのである、犬は號令の一下を待つて居る、此時充分に心を落ち着けて飛び出した鳥の狙越を誤りさいしなければ獲物は既に我手にあると同樣である。

散彈の撰擇

雉に對しての散彈は六號乃至四號としてあるが同じ有効彈であれば彈の小なるだけ散彈網が密になつて、獲物に對して命中も多くなつて効力のある譯だが同じ雉でも痩土に產したものと、肥沃の地に育つたのと、溫

暖の處に居るのと、寒い處に居るのと散彈の効力が大に違ふ、痩せた處と肥た處に居る雉は目方で三四十目乃至五六十目は違ふ、習志野附近に居る雉には六號乃至五號で充分の効力があるが東北、秋田附近では六號では効力が少くない故四號乃至五號を用ひるがよい、痩せた所に居る雉は脂肪が少いが肥沃の地の鳥は脂肪が充實して居るので彈の侵徹力が違ひ又暖い處は羽毛が薄く寒い處は密になつて居るので之れ又侵徹力が違ふ、平地の鳥は飛翔力が弱く、山地の鳥は飛翔力が強い、之も又彈の大小に關係して來るので、寒國や肥沃の地若くは山路に向ふ時には大きな彈丸、南方及び痩土平野にあつては小い散彈を用いる。

雉の狙撃

雉に對しての射撃は多くは樹木のあるだけに鳴に比して著しく困難を感ずる、今一つには獲物が大いだけに雉に對しての慾望より生ずる恐怖心は鳴に對してよりも著しく旺盛である故自然に臆して來る爲である、鳥の飛翔力より云ふと鳴に對して僅かの差であつて、從つて其狙越の差なども極く細微である上に雉は其飛び出すのを前知して待つて居るので返つて射撃は容易な筈であるが實際は困難を感ずるのは樹木に遮ぎられて射撃の區間が短かいのと臆する爲めである、熟練して來れば射撃の準備を充分にすることが出來るのと鳥の大いだけに撃ちよいのと、次第に臆

することも少なくなつて非常に命中率が高まつて來る。

今其狙越に就て記して見よう、雉の一般の飛翔力は一時間四十五哩位であれば一秒間に十一間を飛ぶ、其間に五號の散彈は百五十間の先に達し散彈が二十間行く其間に雉は八尺五寸先に行つて居ることになる、八九尺の狙越は非常に多過ぎる樣で射手が狙越をする場合に多くは僅か二三尺であるが、其發射に際して銃口が鳥の飛ぶ方向に微動する、其微動の差は着彈點に於ては著しき差になつて居るので、實際の八九尺の狙越になる譯である。

初矢を外した時

初獵近くには一腹纏つて居り初冬より一二月の頃には雌雄別々に群をなして、雄は稍や深き藪の中、雌は比較的淺き藪の內に集合的生活をなして居る故、度々荒した後でなければ、餌啄の場所に臭があれば三四羽乃至七八羽が居るもの故初矢を損じても其鳥に二の矢をかけることは不得策で二の矢は次に飛び出した鳥を擊つのが得策である、猶出來れば初矢を擊つ前に控の彈二發を持つて居つて二の矢を擊つと同時に詰め換へて三回四回と擊つのが上乘であるが之は動作が敏捷であつて、熟練なる射手にして始めて出來るものである。

鳥を拾ふ時の注意

初矢、二の矢共撃ち落した時に犬は初矢の落つるのを見て夫を拾に行くので時に依つては二の矢は自身に拾ひに行くことがある、其の時据つて居る雉には半矢になつて落ちて居るので、手を伸して拾ふとする切那に飛び出すことが往々ある、据つて目を開いて居る雉は何時飛び出しても差支のない樣に銃を構へ其傍を行き過ぐる樣に見せかけ歩行きながら充分に注意を拂ひて右手で撲ぐる樣にして急に鳥を押へるので若し飛び出せば直に撃ち落して了ふ、目の開いて居る雉を無雜作に捕らふとするのは無用意である。

鳥の保存法

雉獵としては少なくも二三日の行程を要するので獲物の保存も等閑に附すべきものでない、其獵期の始めは小春日和で中々暖い日が多いので獲物は損じ易い故外見は損ずるも、捕つた鳥は直に腸を割て臓腑を取り出し滯在の日が長くなる時には鹽を塗つて腐敗を防ぎ、宿に歸れば地上へ井へ鼠、鼬等の害を防ぐ爲に盥、臼等を伏せて置けば、二三日は充分に保存することが出來る。

道案内と辨當

鳴獵は平野に於ける獵である故其方角を誤まつても心配する程のことはないが山は一嶺一澤を誤まれば大なる過を來し、或は一命にも關係する

程の大事を出來することも敢て珍しくない、地方人は東京に來て方角を失ふと同樣山に馴れざる都會の人が山に行つて方角を失するのは當然である夫れを僅かに一枚の地圖に依つて方角を知らんとするのは以の外である、其地方に居ればこそ山の形目標となるべき高き樹木等を熟知して居るので多少道を誤まつても方角を知ることが出來るが其地方に馴れない人があつては山の形、目標の樹木等を見ても容易に解るものでない、されば山に出獵せんとする人は獵場の案内は兎に角く、其地理に馴れた者を道案内者として必ず同伴すべきものである、道案内者を傭ふと同時に弁當は如何なる場合でも必ず多量に自分で携帶すべきものである、

鳴獵は人家より遠ざかることは容易になきも雉獵には一歩道を誤まれば遠く人家を離れ又獵僕と如何なる場合に離れないとも限られない、其の時に獵僕に弁當を持せて居れば自然に飢餓に迫つて非常に困難を來すことがある故、弁當に水筒、マッチ等は必ず携帶すべきものである、されば弁當も一食分と限らずなる丈た多く携帶するがよい、獵友に離れ、道案内者を見失ひたる時には日の暮れざるに先立つて澤に就て下る可きもので、山越して出でんとするのは最も危險であれた決して行ふべきものでない。

鶏雉の部

鶏雉の産卵季

雉の人家近くに棲んで居るに對して鶏雉は山を奥へ〳〵と棲んで居る、從つて雉の穀類を常食とするに對して鶏雉は椎、榧の實、零餘子等を常食として居る、で深山の谿谷で椎、榧、蕎藷のある所は鶏雉の居る所と見てよい、餌啄の關係からして雉は多くは田、畑を遠く離れた處には少くないが鶏雉の餌は多くは人と關係がないので、遠く人家を離れて人跡の絶ねた處に返つて棲息して居る、從つて其産卵する處も深山の谿谷

の中腹で檜、杉、松、楢等の樹木の根際で雨水の浸入を防ぎ得る處に雉と同樣に僅かの窪味を造つて産卵する、産卵期や産卵の數、孵化日數等は凡て雉と同一であつて八十八夜前後より愛が乘つて交尾を始めて産卵する、産卵した卵の數は五六個乃至十個位になつて雌は初めて抱卵をする、抱卵の日數は二十四日目で孵化する、孵化した後は親鳥は雛の羽毛の乾くのを待つて餌を探すことを敎へる、斯くて鶏雉は羽根の丈夫なだけ孵化後僅かに三四日にして七八尺は飛ぶ樣になる、鶏雉と雉とは谿谷の中腹と平地に産卵するとの差であつて其他は殆んど同じである。

鶏雉の居る場所

雉の耕作地の近くに居るに對して鷄雉は山の峻峭なる處に棲息して居るが殆んど谿谷に居るとのとして搜索すれば間違はない、險しい谿谷でも下枝の落ちて腐つて居る陰鬱の所には少くない、傾斜の險しい處で多少の流れがあつて、水を呑む事が出來て中腹には椎、榧、薯蕷等の實で鷄雉の餌となる物が發生して居る處には必ず棲息して居る、鷄雉は雉ほどには砂浴はしないが少しは日當のよい乾燥したる砂浴の出來る處でなければ棲息して居るものでない、谿谷の兩側とも同じ樣な狀態であれば、午前と午後とに別なく兩側ともに居るが、兩側共同じ狀態でも一方の陰山が坊頭山で草木が綺麗に刈取られてあれば、逃避するに不便である故

其反對の陰山に樹木のある方に棲息して居る。

鷄雉の餌啄

餌啄は朝夕二回であつて餌を搜す時には上より下ることがなく下より何日も同じ樣に繰り返して幾回となく登つて居る、初冬の頃木の葉の凋落して餌を隱くして餌啄するに不便になれば日の暮れかゝつた時喬木の先にある寄生の實を食ひに上るものである。

射擊の準備

犬を入れる時には先づ澤の狀態に依つて鷄雉の居る可き所を見定めて澤の中腹を傳つて進んで行くのである、鷄雉の谷落しと云つて多くは下る

ものであるが、彼の身を隠すに不便な所であれば嶺越もすれば、谷越もする故其逃げ去る方向は研究すべきことである、嶺より陰山が樹木が鬱蒼して谷の九分位の處より飛出したる時には嶺を越し、中腹より下でも下は樹木が少なく開豁したる處では左右の嶺を越し、一方が坊頭山なるときは反對の木のある方に越し下が樹木があつて隱るに充分であれば大方は下に飛ぶもので、谷の模樣に依つて飛ひ去る方も千差万別であれば周圍の狀態に應じて犬を入れるのである、嶺越し、谷越しをする時でも一度は下に飛び次で向方を定めて再び上に向き横に切れるもの故犬は下から入れてよい、又嶺、谷を越す時でも樹木のない處、又樹上を高く飛ぶことはない、樹と樹の間を低く飛ぶものである故、其飛び去る方向を豫め見定めて射擊の位置を取つて待つて居るのである。

鶴雉の飛翔力

風切り羽根は他の鳥類に比して著しく丈夫に出來て居つて、從つて其飛翔力も獵鳥中では及ぶものがない、殊に其谷落しなどは電光石火放心して居れば殆んど其形を見ることも出來ない位である、で其谷落しは飛行機の所謂空中滑走である故早いのも當然である、嶺越し、谷越しをする時には他の鳥類に比しては早いが、所謂空中滑走の谷落しに比して見ると著しく速力は違ふて居る、普通谷落しの速力としては一時間六十哩、

日本に於ける急行列車の二倍以上の速力、一秒間に十四間以上の速力で飛んで居る、一寸油斷して居る間には十四間先に行つて居るのであれば鷄雉の飛切りを擊つとは最も動作の敏捷と熟練とを要するのである、之を散彈の速力に比べると、散彈は銃口を遠ざかるに從ひ其速力を減ずるか鳥は飛び出した其の時には速力は遲いが次第に其速力が增加するので鳥の速力と距離の增加に比例して狙越が多くなる譯である、鷄雉の速力を一時間六十哩とすれば一秒間に十四間四尺五寸を飛ぶことになる、五一號の散彈が其の間に百五十間の先に達して約十分の一弱の速力を有して居る、散彈が二十間の所に達する時には鷄雉は一間と五尺七寸約二間先

を飛ぶことになつて居る、此の鷄雉の約二間飛ぶ時間は僅かに零秒、一三三であつて瞬きをする間には遙かに遠方に飛び去るのであれば非常に敏活の動作を要するのである、二尺や三尺の差は左程にも感じないが、二間も狙越をすると云ふことは其差が餘り甚だしいので一寸出來難い樣に思ふが之は散彈と鳥の速力を示したものであつて實際に熟練の狩獵家は發射する瞬間に習慣になつて不知の間に狙越をして居るのである。

雉、鶉雉の飼育法

狩獵家としては獵鳥の蕃殖、成長の模樣等を知るのも狩獵をなす上に大なる參考ともなり、又趣味のあるものであれば其飼育法を記して見よう其詳細は森竹邦彦氏著の養雉全書に氏が英國流の飼育法に倣ふて實驗せられたる處を細密に記載してあれば此茲には其概畧に止めて擱く。

歐洲各國の雉、鶉雉の飼育法に依ると一春に一羽の雉の產卵數は五十乃至八十個としてあるが、氏が實驗したる處に依ると二十個を產卵して居る、之は僅かに二ヶ年の實驗であれば數年の經驗を積めば五十乃至八十個位の卵を得ることが易々たるものであらふ。

卵より孵化して飼育した雉でも亦野生の雉を捕つて飼育しても產卵するには別に變りはない樣である、飼育場は高さが一間乃至九尺位で巾と横とは一間乃至一間半を最小限度として、周圍、天井を全部金網で張つて天井は金網許りであると、雉は飛び揚る際に頭を打つ故金網より一二尺を離して別に糸、繩の網を張つて雉が飛び揚つても頭を傷けない樣にして、一坪に一番位の割で飼育する、春の交尾期が來ると子飼でも野生でも同じ樣に產卵する、然かし野生の雉は物に驚き恐怖し易い故漫りに他人が近接しない樣にして置く、野では八十八夜前後から產卵するが、人工飼育は多少後れる氣味がある、卵を產み始めれば、一つの孵卵器若

くは假母鷄で抱かせる數を得るまで、卵を尖狀部を上にして粗殼の內に入れて貯蓄して置く、普通卵の孵化力のあるのは孵化する日數と同一であるとしてある故、雉の如く二十四日で孵化する卵であれば二十四日まで貯蓄して置いても孵化する力はある譯である、で所要の卵を得れば始めて之を孵卵器若くは矮鷄、オケッコー、其他普通の鷄に抱せて孵化させる。

孵化の結果は矮鷄、オケッコー等の假母鷄に抱せた方はよい、假母鷄の抱卵の數は矮鷄で七八個、オケッコーで十二三個、其他の鷄で十數個である抱卵の日數は二十四日で孵化する、孵化した雛は直に假母器に移す。

假母器の構造は母鷄をして雛を介抱せしむる時は、母鷄が立つて自由に運動するときは雛を踏み潰す恐ある故、自由に運動の出來ない漸く足を屈めて立つ位の高さの箱にして、箱の三分の一位の處に雛は自由に通り得るも母鷄は首も出せない格子で仕切つて狹い方に母鷄を入れ、廣い方は砂を敷いて雛の運動場にして置き、運動場の一方には板に摺餌を摺り附けて立て掛け置く。

母鷄を使用しない假母器は箱の底から洋燈若くは其他の方法で箱の內部を溫める樣にして上より毛皮若しくは板に羽毛を植ゑたのを吊して雛が其中に入つて溫まる樣にする、假母器の構造は鶉の飼育に詳記す。

孵化した許りの雛は母鶏若くは毛の中に入つて温まつて居る間に羽毛が乾き、腹が空いて獨りで運動場に出て、餌を探す樣になる、餌は生糠一升に玄米二合の割で之を焙じて粉にして、此の粉百目に對し鮠百目、之は胴返しと云ふて摺餌の内でも最も強い餌としてある、粉百目、鮠百目の割に之に適當の青味を入れよく摺つて板に摺り附けて運動場の一方に立て掛けて置く、雛は羽毛が乾き温まつてよい氣分になつて運動場に出て遊んで居る、遊んで居る間に腹が空いて餌を探して所々方々を突いて居る間に板に摺り附けてある摺餌を突いて始めて味を覺わて食ふことになる、殊に摺餌に生きた小蚯蚓や子々を附けて置くと其動くのを見て突

つくので、餌を探し當るのも早いと共に食ふて味がよいので一層嬉んで食ふ樣になる、雉の雛は孵化後一晝夜位は體中に保有してある營養物で優に養はれてある故其位の間は打捨つて置いても決して差支はない、他の鳥類と異つて腹が空けば獨りで餌を搜して食ふだけの先天性を有して居る故、孵化して後餌を食はないからと云ふて決して心配するには及ばないのである。

三四日で三四尺は飛ぶ樣になる、廿日も經てば假母器から廣い運動處に出して自由に運動させる（運動場の周圍と天井の圍は勿論要す）其の廣い運動場には摺餌に小米、粃、小麥等の粒餌に青菜を與て勝手に食ふ樣

にして置く、充分小米、粃、小麥等を食ふ樣になれば摺餌を廢して粒餌一方にする、雄雌の別は二三十日にして雄は羽の斑が交互になつて切れて居らないが、雌の斑は切れて居るのが明かに分かる、黑毛が七八十日から變り始めて百五六十日位になつて略ぼ成鳥する。

之を農家の副產物とする時は雄一羽に對して雌五六羽を配するのが適當である、雌一羽に二十の卵を取るものとして五羽の雌より一春に百個の卵を採ることが出來る割合である、百羽の內一割半は孵化に損じ、雛の飼育中にも〃一割半を害ひ、三割を失ふものとして七十羽の雉を得る割合である、其飼育費としては摺餌の時が十錢か十五錢、粒餌になつて二十錢、三十五錢は餌に要するが獵期中は潰しにして七八十錢、獵期外には二圓位に取引されて相應に收益がある。

鶉は廣く世界に分布されて居る、本邦の鶉は內地で蕃殖したものと、又渡つて來るものとある、從來本邦に居る鶉の種類は赤咽喉鶉に普通の物との二種としてあつたが、內田學士、黑田學士、波江帝大助手等に依つて、赤咽喉鶉は鶉の愛の乘つた時に咽喉の毛色が變つたのであつて別種でなく、普通の鶉の變色したものであることを發見され、內地の鶉は一種類となつた、又臺灣の三斑鶉、滿洲の姫鶉は鶉の同種屬ではあるが、鶉の控へ爪のあるに對して三斑鶉、姫鶉には控爪がないので內地の鶉とは全く異なつて居る。

日本名鳥の一

鶉は日本名鳥の一つであつて、露宿る深草に啼く聲は詩人をしてうたゝ秋の哀を感ぜしめて詩歌に斷腸の思を殘して居るものも少なくない、其啼聲の賞翫すると共に、其肉の美味なること鳥類中で之に越すものなく肉類中の珍味として賞翫されて一椀の吸物數十錢、世人は猶ほ不廉とせずして舌鼓を打ち獵期外にあつては殆んど鶉一羽が鷄一羽の直段と比敵する、從つて獵鳥としても尤も珍重されてある。

鶉の蕃殖地と分布

本邦には重に東北地方の高原及び富士の裾野、淺間の山麓等に蕃殖して居る、秋爛けてからは廣く全國に分布して奥羽地方より九州まで渡つて居る、又奥羽地方には積雪の中に僅かに半坪程の雪の積つてないボサの中などにも隠れて居る、其食物は稗、粟、黍若くは雜草の實或は畑、野に發生する小虫等である、彼の蕃殖地の高原の耕作物としては重に稗、粟、黍類で、秋漸く爛けて冷氣を覺ねると共に之等の耕作物も刈り取られて餌がなくなるより次第に高原より下つて全國に分布するのである、鴫獵の末期十月の末より多くは堅田に隠れて後れ穂の粃と小虫を食ひ、十一月になつて田が全く秋穫が終りて田に餌のなくなると共に隠るゝ場所のなくなつた時には、萱野、草原、荒畑及び河原の砂原等僅かに雜草のある處に隠れて雜草の實、小虫等を餌啄して居るが、十二月より一月にかけて寒氣が斬く募つて來ると、之等の地て北風の受けない日當りのよい處に居つて餌啄をする、此鳥も雉科に屬して居る故雉と同樣に砂浴をする故多くは乾燥した所に隠れて居る。

鶉の捜索法

狩獵としては、鴫の泥田、山鴫の鷸蒼したる林の中、雉、鷄雉の山間で何れも困難の場所であるに對して鶉は平野の極く淺い芝原に居るので歩行に樂で疲勞困憊等が少なく、且つ飛翔力の遲い鳥である故打ち易く、

狩獵として最も愉快の獵である、殊に最もよく犬の動作を見ることが出來るので、中々趣味の深いものである。

其獵期としては鳴獵の末期であれば堅田より、堅田に添ひたる堤防、畦等の草原に犬を入れ、秋の收穫が終れば萱野、芝原、荒畑、河原等の草原に、十二月より一月の寒氣の强い時には北に高味のある乾燥したる草原若くは河原を搜して見るのである。

鶉の後立ちと云ふて歩行た後から飛び出すことが往々ある通り、極く立ちの遲い鳥で寧ろ横着に近ひ方で、踏まれても飛び出さないことがある他の鳥類は人の足響を聞けは直に逃げ出すものであるが、鶉は人の足響位では容易に飛び出さない。

著者は曾つて東北地方に遊んだ時積雪の中僅かのボサの中から一羽の鶉が飛び出して、二丁程離れた所に雪の消わた半坪程のボサがあつて確に鶉は其處に降りた、犬を入れても飛び出さないので、踏み始めたが夫れでも出ない、然かし他に雪の消えて居る所はないので、今度は克明に草を分けて搜して見て始めて飛び出したのである。

されば犬としても嗅覺の鋭敏であつて、最も緻密に探すものでなければならぬ、此鳥も他の鳥と同樣に、友棲を好む鳥である故一羽居つた處には必ず他に一二羽は潜んで居るものである故克明に探すことが必要であ

る、又追ひ出されて降りた鳥は地上に臭を殘すことが少ないので直ぐ探しては犬は容易に嗅ぎ出し難い故、一二時間經つて其臭の着いた頃を見計つて再び探せば容易に見出さるゝものである。

鶉は獵鳥中で飛翔力の最も遲い鳥であるが、風のある日殊に大風の日には非常の高速力を出して飛翔する、其飛翔するにも他の鳥の樣に高く飛び揚がらない、平行に飛ぶので射擊には最も容易である、其飛翔の速力は鳴に比して餘程遲く、一時間に四十哩飛ぶ鳥は遲い方であるが、鶉は一時間に四十哩に達しない、先づ一秒間に八九間の所である、夫れで十號

の散彈が二十間行く間に鶉はどの位先を飛んで居るかと云ふに、散彈も雉、鷄雉等に使用する五六號の散彈に比すれば小くして重量も輕くなつて其速力が遲く、二十間を行くに零秒一五四の時間を要するので、其間に鶉は約五六尺先を飛んで居ることになる、散彈が十間行く間に鶉は二三尺位飛んで居る、で十間の處では二尺、二十間の處では五六尺の狙越が要する譯である。

鶉の飼育

昔は鶉は其啼聲を娛む爲に飼育されて、一羽の鶉に千金を投じた諸侯もあれば、又鶉權兵衞の逸話も遺つて居るが、現今では啼聲と云ふ趣味の

爲に飼育するよりも食用として卵を採攝する實用的方面に向つて多く飼育される樣になつて來たのである今其飼育の一般を記して見れば。

鶉の飼育法

鶉は非常に産卵力の多い鳥で飼育の巧なる人になると一年三百以上も産卵させる、極く少なく見積つて二百個以上は優に産卵する、其肉の美味なるに連れて其卵も非常に美味で滋養に富んで居る、又著しく濃厚である、其美味で滋養のあるより産卵力の多いのを利用して食用の卵を採取することが勃興して來た、今其飼育法から産卵、孵化、雛の飼育等を順を追ふて記して見よう。

野鶉を飼ふて産卵するまでに仕立てるには容易ならぬ手數を要するが、卵より孵化した鶉は容易に卵を産む樣になる、で卵を産せるには鳥の恐怖心を去つて親むのが最も必要である、手を籠の中に入れても恐怖心のない樣になれば大丈夫である、鳥と親むには常に籠の傍に居つて親切に取り扱ふより外はない。

鶉の最も好んで食ふ餌は野にあると同樣、粟、稗、黍の類である、之れに水さい與へて居ればドシ〳〵大くなる、鶉籠に一羽宛入れて籠を併へく置く、鶉の砂浴をするのは他の鳥類が水浴をすると同樣、身躰を清潔にする方法であれば籠に砂を入れて絶えず新しいのと取換へて遣るのが最

も必要である、夫れで小き籠に飼ふて居るだけ砂を不潔にすることも早い、殊に産卵中などは一層早く二三日も打捨つて置けば砂は泥々になる籠に砂を入ると同時に蛎殼の碎いた物を入れて胃の消化を助けて遣る、籠の置場は羽虫が發生し易い故最も清潔にして置くことが肝要である。粟、稗、黍の類のみ與へて居つては容易に脂肪が乘らない故愛が發生しない、從つて産卵もしない、産卵をせさるには粟、稗、黍の撒餌を摺餌に換へて遣る、摺餌は生糠一升に玄米二合の割で生糠は水分を全く去つてサラ〳〵と狐色になるを程度に、玄米は五分の一程跳ねるを程度に焙じ、之を挽き細き毛篩で篩ひ此粉百目に對し鮑の粉七八十目の割合に之に適度の青味(菜葉の類)を水で充分に摺つて與へる、鶉は摺餌を食ふとヅン〳〵脂肪が充實する、脂肪が充實すれば從つて鳥に愛が乘つて來て雄が切りに雌を戀しがつて鳴く樣になる、雄の囀り始めた時には交尾期の來た時である故雌と雄の籠を幷べて接して置くと雄は雌の籠に入らんとして焦る樣になれば雄に充分に愛の乘つた時で、此時兩方の籠の戸を開いて一緒にすれば直に交尾するものである。

雌も充分に脂肪が乘り肥滿して來れば別に雄と交尾させないでも無精でドン〳〵産卵するものであるが、夫れが餌が弱くて脂肪が乘らざると同時に鶉が人に對して恐怖心があつては容易に産卵するものでない、され

ば飼育者は常に鳥に接して親むことが最も必要である。

卵の孵化

卵として食するには別に受精の必要もないが雌を取るには是非とも交尾させなければならない、で朝夕二回宛交尾させれば充分である、で受精した卵は所要の數に達するまでは籾糠等の中に入れて貯蓄して置くことは他の卵と少しも異なる所はない、偖て所要の數に達すれば、矮鶏若くはオケッコーに抱かしむるのである、鶏卵は抱卵後十八日目に孵化する普通鶏にあつては幼雛の間は母鶏で保育せしむるも鶏の如き小鳥にあつては雛は一層小さく又其對抗力も少なき故若し母鶏が誤まつて踏むことのある時には直に壓殺する故孵化すると直に母鶏より離して保育するのが安全である。

鶏をして卵を孵化せしむることは出來なくはないが、形態が小さい爲め抱卵の數が少ないのと、野にあつては雄は雌の爲めに餌を運ぶが、籠の中では夫れが出來ない故雌は自然に巣を離れて餌を漁ることになつて卵を冷す恐れがある、今一つには不自然な籠のに中あつて長い間巣に居ると云ふことは鶏として非常に困難である、で矮鶏かオケッコーに抱かせるのは數が多くして危險が少なく結局利益である。

鶏の保育

孵化した雛は母鷄より離して保育する器具を假母器と唱へて居る、假母器の構造は巾一尺に長さ一尺二寸、深さ五六寸の木製の箱にて箱の下に洋燈を點じて箱の内部を溫むる樣にして上より毛皮を吊すか若くは箱の約四分の一を覆ふ程の蓋を造り蓋の内面には鳥の羽毛を植ゑて雛が箱の底に立ては雛の體が上部四分位が其羽毛の中に隱るゝ程度の長さに羽毛を切て蓋をする、又箱の四方の三は運動場として雛が自由に出で運動をする樣にして置き運動場の端には摺餌を板に摺り着けて立て掛け置き、雛が腹が空けば出で餌啄をし、暖まれば運動をなし、疲るれば入つて暖を取りて休む自由の出來る樣にして、箱の底には一面砂を敷て置く。

雛は孵化後直に假母器の中に移しても羽毛の乾くまでは溫まつて居る、羽毛が乾けばヒヨコ〳〵運動場に出で來る、雛は孵化後或る時間の間は體中に保育する處の營養物に依つて養はれて居る故食物を與へなくとも餓死することはなく、自然に發育して居る飢が訴へて來れば自分で出て來て始めて餌を探す樣に自然に備なはつて居る故、其間は餌を攝らないでも心配するには及ばない他の鳥類は母鳥の餌を運んで呉れるのを待つて居るが、雉科の鳥類は孵化すれば自分で餌を探す運命に生れて來て居るので餌を探して食ふことを知つて居る、體が溫まつて羽毛が乾き腹が空いて來れば獨りでに羽毛の中から運動場に出て來て餌を探し始める、

餌は板に摺り着けてあるので雛は何となしに方々突いて居る間に板に摺り着けてある餌を突いて始めて餌を食ふことを覺るのである、

餌を食ひ始めて腹が滿ちれば羽毛の中に入つて溫まつて居る、腹が空けば又出て餌を食ひ運動をなし、寒くなれば入つて溫まつて居つて人間より餘程怜悧であつて人間の世話は少しも要さないのである。

鶉の蕃殖力

之が六十日目には立派の親鳥となつて卵を產むので其蕃殖力の强いのには驚かざるを得ないのである。

茲に一番の鶉があるとして卵は十八日目で孵化する、孵化した雛は六十

日目には成熟期に達して產卵する、最初一番の親鳥で十個の卵を採つて之を矮鷄に抱かせて孵化させる、卵を產む間は十日、抱卵期は十八日、成熟期が六十日、約九十日で十羽の雛が出來る、其三割を害ふものとして七羽、之を雌雄半々とすると三番となる、九十日目からは親の番と子の三番で日々卵が三個乃至四個宛つ產むことになる、で百日目位からは非常の率を以て雛は增加することになつて半年の後には千羽近くなり一年目には三四千の數となる譯で少なく見ても一番の鶉は一年の後には千羽の數にはなる、最初五六番の鶉を飼育して行けば一年の後には三四千の鶉が優に出る譯である、農家の副產物として一羽の鶉を飼育するに成

熟期までに十五錢乃至二十錢の費用を要するが、目下其卵の價額は二十錢以上である、之を其四分の一の値段五錢として産卵の數の三分の一を孵化し、三分の二は食用に販賣するものとして、賣つた卵の値で雛を充分に飼育するとが出來る、鶉は獵期中は値も安いが獵期外になると五六十錢乃至一圓位である、一年間の費用は卵の販賣で支辨して三百の鳥が出來る譯である、一羽を五十錢としても百五十圓になつて農家の副産物若くは中流以下の家庭の副業として最も收益の多いものである。

夫れで僅かに鳩卵大の卵は二十錢以上するとは一寸受取れぬが、其卵は非常に濃厚で僅かに鳩卵大であつても普通鷄卵の五六個以上の滋養分は充分に有して居る、從つて肺病其他の貧血には特殊の効がある、又下痢症にも非常に利いて、殊に小兒の下痢などには立所に効が顯はれるとのことで、滋養重に藥用の方面に使用されるのが高價の原因である、又食用としても吸物に二つか三つを落して見ると極ぐ見事で又味に云ふべからざる所の風味がある、コーヒーの中に入れても又好味い、肉も珍味であるが、其卵も亦他の卵の及ばない所の味を持つて居るので上流社會にあつては珍味として珍重されてある。

たしぎ獵の卷

しぎは既記の如く本邦に於ける好個の獵鳥であつて、其種類も非常に多く學術上よりは千鳥類、鷸類、鳴類の三つに分れて居るが、其内獵鳥として最も趣味のあるのはたしぎ類である、たしぎ類に屬して居るのはたしぎ(鳴)、はりをしぎ、ちうしぎ、おほしぎ、こしぎ、あをしぎ、やましぎ、たましぎ、ちしぎの類である、何れも其の數が少なくないが獵期前に渡り去るものが多いので獵期に際して最も多いのはたしぎ(鳴)で次てはやましぎ(山鷸)である故此茲に主として鳴、山鷸に就て記すことにする。

本邦に於ける鳴

其の生活狀態を簡單に述て見ると西比利亞の東方に蕃殖し暖を追ふて次第に南々と飛翔して本邦には八月の末より九月の初めに渡り來り始め十一月より十二月の始めには多くは南方に去て春は暖に追はれて翌年三月より四月にかけて再び南より歸て來て北へ北へと飛翔して再び西比利亞の東方に飛び去るのである、本邦に滯在して居る期間は、秋期渡來の時は長く、春期歸來の時は短かい。

鳴の分布の狀態

秋期渡來の時にはまだ成育しない者が多い彼等の蕃殖地に居る間は極く短く僅に巣立ちたる許りで餌を漁つて成育しながら暖を追ふて南々と飛び來り本邦に渡來する頃になつて漸く成鳥するのである、九月の始め頃渡來した鳥には未だ全く羽毛の成長しない鳥が多い水田の多い我國は彼等には最もよき成育の地である、彼の渡來の順序は北海道より青森三陸地方を經て關東の大平原に至り次で關西より中國九州地方を經て南方は臺灣より比律賓群島までも飛び行くのである。

各地に渡來の期

其北海道に渡來するのは九月一杯であつて十月の初めには早くも內地に姿を隱して青森より三陸地方に顯はるゝのである、青森より三陸地方は寒氣の早く來ると共に彼を養ふ所の餌の關係よりして一度追ひば全然南に去つて留まることがないが、關東の大平野は餌の潤澤なると青森、三陸地方に比して寒氣の酷烈ならざるより追はれても容易に飛び去らず、偶には其儘越年して南方に去らないものもある。

初獵の頃には殆んど關東の平野に居つて關西には數ふる程しか居らない

又中國、九州地方にあつては鵲類の一種で、關東地方には七月より八月に渡り來る大シャク中シャクの類が盛に居て鳴は未だ影も見せない、其の鳴の渡るのは關西地方は獵期過ぎ關東で追はれた鳥が渡り中國九州地

方は關西で追はれた鳥が渡るので十一月より十二月である、又春の歸去に際しては本邦に居る期間が短かいので三月中旬頃に九州地方に顯るが直ぐ渡つて、四月には關東の平野に來り五月には全く去つて了ひ內地に殘留するものがないが北海道より樺太地方には渡り後れたものは其儘止まつて產卵するものもある、現に北海道農科大學には同地に於て產卵した卵を採集してある。

鳴打の獵裝

鳴打は他の狩獵と異なつて水田に入るので特別の獵裝を要する、鳴獵としての獵裝の要件は水の浸透せざること體溫を保持せしむることゝは主眼である、水に浸つて劇しく活動しながら水の透さない殊に秋爛けて天漸く冷氣を覺えて來た時に水に浸りながら冷へない獵裝とは六ヶ敷い注文で之には隨分苦心して居る人もある、水の浸透しない方法としては護謨の防水布でヅボンを調製した人もあるが水田の中、葦の藪を駈け歩くことゝて忽ちに裂けて結果はよくない、下に毛製類のヅボン下を穿ち、其上に地の積んだ木綿製のヅボンを着けるときは體溫を保持すると水の浸透を防ぐ上に於て一番よい樣に思ふ、ヅボンに防水液を引けば猶よい又足袋の底は護謨底に甲は周圍に石底を附ければ先づ申分がない、猶足袋は少し大き目にして毛糸製の靴下を穿けば充分である。

鳴獵と犬の使用

鳴獵に犬を使用して居る人もあるが本邦に於ける現在の獵法としては犬の使用を必要として居る人は少くない、歐米各國の如く多數の犬を飼養して搜索、運搬、其他雉、鶉、鴫と使用の異なるに從ひ、鴫にはレトリバーかスパニール、雉にはセスッター、ポインタと種類を異にして使用する時には鳴獵にも犬の必要を認むるも、然るに我國の如く一頭の犬を以て搜索運搬其他萬事に使用する狩獵の狀態に於て鳴獵にまで犬を使用せんとするは無理な注文である、鳴は犬を以て突擊を加へざれば藪の中を潛逃する雉鶉とは異なつて人の足音を聞けば必ず飛出す鳥である、飛び出す鳥には敢て犬を勞して搜索せしむる必要は認めない返て犬を使用すれば一羽を追ひ出して靜止すればよいが猶先々と追ひ廻はつて一時に多數の鳥を追ひ出して返つて不利益を招ぐので不必要として居る人が多い、鳥を擊ち落した場合に犬をして搜さしむるの必要は認めないでもないが、之も犬が搜し廻つて他の鳥を追ひ出す故に使用せんとするにはレトリバーか又はスパニールの如き種類の犬で特に鳴獵に訓練した犬を要する、一匹の犬でポイントもすればダウンもする又持ても來ることを望むは不可能のことで鳴獵には犬を訓練する勞力程の功はない。

鳴は聽覺と視覺の最も發達した鋭敏の鳥である、彼は獵鳥として擊ち始めた當時にあつては人の極く間近く來るまでは容易に飛び出さゞるものであつたが然るに彼は年々敏くなつて今では遙か遠方の足音までも聞き附けて直に飛び出して容易に人をして近か寄らせない。

彼等は年々人間より襲擊さるゝので人を恐怖するの觀念は遺傳的に傳はつて今では先天的に人を恐怖する樣になつて來た、又人を恐るゝと共に鷹に對しても非常に恐怖心を有して、彼の棲息の場所は少も鷹の目に觸れざる所のみを撰む、又地に降る時に際しては友鳥の居る所、餌のある場所、隱るゝに適當なる處に非ざるば決して降りない、降りて後は直に隱れて了い、降りてから後隱れ場所を搜す樣なことは斷じてない、降りるに際して先づ之等の場所を見極めて下降するので其視覺、聽覺の鋭敏なることは驚く可きものである。

本邦第一の棲息所

本邦に於ける鳴の棲息所としては三陸地方に於ては品井沼一帶及び關東の平野に於ては荒川、利根川に添へる流域一帶より渡瀨川、印旛沼、手賀沼、霞ケ浦沿岸は凡て低地で泥地なるを以て鳴の餌となるべき虫類の發生に最も適したる處である故鳴には好個の棲息地である、殊に利根、荒川兩川の流域沿岸は河身よりも低地なるを以て多少の降雨でもあれば

河水は直に汎濫して田を浸し稲作を枯死せしめて一層虫類の發生を多からしむるを以て鳴の棲息所としては本邦第一である、次には濱名湖畔、琵琶湖其他至る所の低地に棲息して秋は暖を追ふて南に飛び、春は暖に追はれて北に歸るものである。

鳴の食物

鳴の餌としては稲田に發生する虫類であることは既定の事實であるが稲田に發生する虫類とは如何なる虫の種類に屬するか、鳴の胃液は強力なる消化力を有するものと見ねて澤山の鳴の胃を解剖しても胃中には容易に餌の原形を存したる物を發見することがない、朝早く若くは雨天の時等餌を漁つて居つた鳥を擊つて胃を押して餌を吐かせて見ると蚯、糸蚯蚓、田蛆等を吐き出すが中にも蚯蚓が一番多い、されば鳴の餌としては蛭、糸蚯蚓、田蛆及び水上の小虫等であることが判明する、其内でも蚯蚓は多少でも水のある場所に多く發生するので殆ど彼等の常食である。

鳴の發生する場所

鳴の餌となる蛭、糸蚯蚓、田蛆は如何なる場所に發生するかと云ふに、糸蚯蚓は堅田にも棲息するも、田蛆は水のない處には發生しない、蚯蚓は柔かき泥土のある所に發生し、田蛆は柔き泥にて稲の腐敗した處に發生する虫類である、柔き泥土でも赤澁、鹽分、石油其他魚類の棲息せざ

る惡水の處には發生しないが又清水にも發生しない、水に多量の肥料分を含有する膏腹の處には之等の虫類が多く發生する。

洪水の年には鳴が多いと云ふのは洪水の爲に稻が枯死して腐敗したる爲めに鳴には好個の餌たる田蛆が發生する故鳴は其の餌のある處に集まるより從つて鳴が多い譯である。

鳴の居る所

鳴は田、沼地、殊に田の刈跡に居ると云ひ傳へて居るが其の餌となる虫類の發生に依つて鳴の棲息所の概略は知る事が出來るが猶鳴に附て詳細に記して見ると涉禽類であつて水に入ても水に潛ることが出來ない、蚯

蚓や田蛆が如何に多く居ても水の深い處には居らない、鳴の足は二寸位しかなく嘴も一寸五分乃至二寸である故彼の餌を漁る所は水深二寸以内の所と見なければならないが蚯蚓、田蛆は水面にのみ浮いて居らない多くは泥中に棲息して居る故鳴の餌を漁る場所は水は地上と摺れすれにて時に窪味がありて嘴が容易に泥中に入つて自由に餌を搜し居る程の柔な所に餌啄し從つて水は地と摺れすれとなつても地中の堅い處には決して居らない。

鳥類には凡て保護色を有して居るが、鳴は殊に甚だしく少しく離れると土塊であるが稻株であるか將た鳴であるか容易に見分け難い程の保護色

を有して居る故鳴の色と見分の着く赤土等の處には如何に餌があつても決して居るものでない。

前述したる處に依つて鳴の居る場所を綜合すると泥土で泥と水が摺れずれになつて水の澁氣のない黑土の處である。

鳴の夜と晝

又鳴は夜間と晝間と其居所を異にする、晝間は鷹を非常に恐れるので如何に餌は多くあつても隱れ場所のない處には決して餌啄しない、隱るゝに都合がよくても又飛び出して逃るに都合のよい處でなければ又餌啄しない、其危害の恐れのない飛び出すに都合のよい處、で雜草の生ひて居る處か若くは稻の刈跡の株等に隱れて居つて陰蔽物のない所に剝出しに餌を探す事は決してない、又涉禽類であるだけ水より離るゝ事は苦痛である故常に水氣のある所に隱れて居る夜は彼に危害を加ふる者がないので田若くは其他の沼地でも中央に出て自由に餌を漁つて彼の營養の大方は夜中に執るので晝夜居る所は全く異なる。

又晝間でも全く餌を漁らないではない隱れて餌を漁る場所があれば必ず餌を漁つて居る。

田、沼地に於て其中央部に糞及び其足跡のあるのは夜間餌を漁つた處で之を夕代と唱へて此茲には晝間は決して餌啄しない、畔に添ふて糞及足

跡を發見せば之を朝代と唱へて此茲は朝餌を漁つた跡であつて鳥が居るものと見て差支はない。

田、沼の乾上りたる後

田、沼地の乾上つた時には小溝の田、沼地と同じく泥土にて水が漸く其泥土を浸す位の處にて溝の縁に添ふて鷹の目を避く可き陰蔽物のある處に棲息して餌を漁つて居る。

又稻田の刈取らざる所は飛出しに不自由であるから棲息しないが稻田でも斯かゝ餌のある處には畔に添ふて飛び出す丈けの餘地のある所を撰んで、其處に隱れ塲所を見出して棲息して居る。

餌のあつて隱るゝに都合のよき塲所であれば、午前午後等時間には餘りに關係しないが大體から云ふと、朝は北西に陰蔽物ある處に棲息し、日中は南に陰蔽物、夕方は東に移つて棲息して居ると思へば大體に於て違がない。

鳴の棲息所の判斷

鳴の棲息所に就ては大體に於て說明は盡したが猶銃を擔ふて野に立つた時に隨所に說明を試みよう銃を擔ふて野に立つた時に最大の急務は前述した處に依つた鳴の棲息所を判斷することである。

多くの狩獵家の中には此判斷を誤り若くは知らざる爲に鳴の棲息せざる

處には射擊の姿勢を取つて進んで行く、不斷射擊の姿勢を取つて歩くと云ふことは狩獵家に取つて大なる損である、常には銃を擔ふて身體を樂にして體力の消耗を防ぐことは最終の勝利を得る最大の原因であれば常に服膺すべき最も必要なる要件である、然るに鳴の棲息所の判斷を誤り若くは知らざる爲めに、鳴の居らざる處に射擊の姿勢を取つて歩くので肝心の鳴の居る場所に來た時には既に身體に疲勞を來たして射擊の姿勢が崩れて了ふ、甚だしきは自分の判斷の誤まつて居るのに氣が着かず、鳴の出でざるに自暴自棄を起して銃を擔ふと云ふ始末になり、斯かる時に不意に鳴が飛び出すので、狼狽て銃を構へる間に鳴はサッサと逃げて了ふ。

獵場に來て獲物に逢ふて命中不命中は別問題で發射せざると云ふことは其人の不用意を示すもので狩獵家の最大の恥辱である、されば一度野に立つ以上には充分に判定して其棲息所と認めた時には一直線に其處まで進むのである、愈々其處に接近した時に始めて射擊の姿勢を執り銃を擬して進むのである。

銃を構へて

棲息の場所を判定して進む時には水田乃至蘆池、河沼でも道巾の廣く歩行に便利なる所は人の襲擊を受け易いことを知つて居る故絶對に居らな

い、畦、畔乃至道でも漸く其形を存する位であつて最も歩行に困難なる處を撰んで其の畦、道に添ふた所に棲息する故搜す場合にもそふ云ふ處を撰んで歩くのである、搜す時には必ず此茲より今飛び出すものと假定して擊つ許りに銃を擬して進んで少しでも油斷してはならない、又居る處と假定した處に鳥が飛び出さない時には歩行を止め、銃を下す事があるが之は斷じて不可である、必ず其場所を搜し終るまでは決して歩行を中止し、若くは銃を下してはならない、鳴は歩行して居る間は飛び出さないでも歩行を中止すれば遠方でも飛び出す故、若し止むなく歩行を留むる場合には充分に注意を拂ひ銃を擬して留まるのである。

鳴擊をする場所にて自由に歩ける樣な所がない、歩ける所には鳴の居らざることは既載の如くであつて歩行に不便であると同時に銃の操法にも非常に困難であるが其處を歩行するに附て射擊の區間を可成的廣く取つて搜す等とが必要である。

田の中間の畦を歩く場合に於て自分の左側は殆んど背部までも容易に發射し得るも右側は僅に半までである故身體を前面に向けて進む時は左側の田より飛び出した鳴に對しては充分に發射することを得るも右側の田より飛び出して右方に飛び去る鳴には發射することが困難である故、中間の畦を歩く時には銃を構へた儘右を向いて横進するのである、斯くす

れば兩側とも容易に發射することが出來る。

風のある時

凡ての鳥類は風を負ふては翼が張り惡くいので飛び出す時には必ず一度は風に向つて飛び然る後方向を定むるものである、鳴の如き比較的兩翼の長い鳥は殊にそふで、風のある時には必ず風上に飛ぶか若くは風を横切つて飛んで風下には決して飛ばないが其の風のある日に搜すには風上より搜すと風下より搜すとの二樣の說に分れて居る此茲には二樣の說を記して諸氏の撰擇に任かせる。

風上よりの說

風上よりの說は、風に順つて搜す時は鳴は風下より飛び出し風上即ち自分の方に向つて飛んで來るので迎ひ擊するの利益がある、假令自分の方に向はないにしても左右何れかに風を横切る爲め飛翔力が遲い故充分に狙ひ擊する事が出來ると云々。

風下よりの說

風下よりの說は風上より搜す時は足音が風の爲め早く聞いて飛び出すが風下より搜す時は自分の來る音が風の爲に比較的遲く聞ゆるので、近寄ることが出來るよし飛び出しても風に向つて飛ぶか若しくは風を横切るので飛翔力が遲い故充分に狙を定める事が出來るとの二說である。

射距離外より飛出した時

射距離外より飛び出した時若くは撃ち損じた時にそれを追ふ人と飛び去つた鳴は其儘にして順々に捜して飛び出した方向に至るのと二説に分れて居るが之も兩者の説を擧げて置く。

飛び去つた鳴を追ふ説

射距離外より飛び出した鳴には注意を拂はずして其儘其處の捜索を續ける人があるが之は大なる損んである鳴は多くの場合に友鳥が居るものである故一羽の鳴が飛び出した其處には他に友鳥が居るものとして差支がない故其所は捜さずとも居るものとして取つて置の場所として飛ひ出した鳥の降りる處を注意する、鳴は多くの場合友鳥の居るを見て降るものである、又一度追出したる鳴は再び追はるれば又元の居つた所に歸るものである故先に飛び出したる鳴より撃つのが順當である、又確かに降りたと思ふ處に行つても居らないので躊躇して居る時に他から飛び出すことが往々ある、之は鳴は降りた處に其儘多くは居るものでない降る時に友鳥の居る所、餌の有無、鷹に對しての避難の場所等を仔細に見定めて他の場所に降りると同時に其の場所に驅けて隱るゝものである故降りた所に居るものと思ふて捜すと返て他の場所より二羽も三羽も飛び出して再び逃すものである、逃けた鳥を追ふ時には降りた附近に就て鳴の隱れ

て居る場所を判斷して搜し、又其所には他の鳥も居るものと心得て充分に其仕度をして搜すことが必要である、此茲で先に追ひ出した鳴を擊てばよし擊ち損じて逃がしても再び元飛び出した所に歸つて行くので又先の所に歸つて搜せば必ず終極の勝利は得らるゝ。

順を追ふて擊つ說

飛び出した鳴を追ふて擊つと云ふことは搜索は確實の樣であれど、之は徒に奔命に疲るゝものである、逃げ出した鳴の降りた場所の概畧は記臆して、順を追ふて其處に搜し行けば中間を拔いて時間を空費することもなく其間に飛び出した鳴も先の鳴の降りた所に又降りるので搜索としては最も上乘のものである。

再三追はれた鳴

再三追はれると鳴は決して草の少ない沼地や刈田には決して降りないで稻の奥手の未だ刈り取られない中に降りて身を潛めて居るが此處も再三追はれると葦の中や柳木の茂つてる中に降り身を潛めるものであれば、多數の人で追ひ廻はした時には刈田や沼地の緣よりも稻の奥手の刈り取らない所や柳、葦の茂つて居る處を搜して見ると必ず其處に潛んで居るものである。

晴天には動作が鈍い

鳴の飛び出しは雨の日、朝早く、夕方等は早い、其の飛翔の速力も早いが降ることも早い、天氣のよい日中等は飛び出しは遲いが、遙か遠方に飛んで、其飛翔時間は中々永い、之は夜中や朝及び雨天の時には餌を漁つて活動して居る故人の來るのも早く知覺するが、日中には隱れて眠つて居るので人の來るのを知覺するのが遲い爲である。

鳥類は一般に早く起るので九時より十一時頃までの間は早くも睡眠を催して來るので凡ての鳥が動作が鈍い殊に鳴の如きは終夜餌を漁るので九時頃には早くも動作が鈍つて來る。

克明に搜せ

普通の場合に於て鳴は人が極く近くに來なければ容易に飛び出すものでない、前述の方法に依つて鳴の棲息する場所と判定したる以上は決して無精することなく克明に田、沼地をS字形に廻りて鳴をして潛伏するの餘地なからしむるのが狩獵をなす上に於て大切である無精は何事をなす上にも大なる防害者であるが狩獵には殊に禁物である、狩獵に於ける足は大なる資本である、資本を惜んでは決して勝利を得ることは出來ないされば狩獵家は獵期外に於ても足の訓練が大切である。

居鳥の發見

斯くして鳴の棲息すべき場所に就て田、沼地等を仔細に搜すときはよく

居鳥を發見することがある、然かし遠方にあつては畦か岸に添ふて堆高く鼠色に見ゆるので、鳴であるか、土塊であるか、容易に見分け惡いが之を識別するの方法は銃を動かして見ると銃の動くに從つて動く、之でも識別の着け惡いのは猶進んで見ると鳴なれば巧に姿を隱して見ねなくなる、居鳥を發見した時には鳥に向つて近寄るだけ近寄つて擊つのは狙を着ける點に於て最も得策であれば近寄る丈け近寄るのであるが近寄るには鳴の視線を去るのが肝要である、然るに何れの畦を進んでも鳴の視線を去ることが出來ない場合には鳴の居る反對の方より一直線に田を渉つて近寄つて飛び出すを待つて擊つのである、居鳥を其儘擊つ人もあるが之れは狩獵の眞味を解せざる人である、居鳥を擊つのは只捕る丈けの娯みであつてまだ飛切りを擊つて命中し其の落つる所の眞味を知らない人である、狩獵家として居鳥を擊つのは敵討するに其寢首を搔くのは卑劣の手段で武士道として價値なきと同樣狩獵家としても最も恥つ可き事である。

飛鳥の狙擊

鳴がキューと鳴いて飛び出す、其時には一秒間に三回位の割合を以て風を切つて居る、此時には未だ充分速力の出來ない時で、二三間の高さに飛んで、不整形の電光形に飛び始めて其方向を定むるのである、此不整

形の時は未だ充分の速力が出ないが其速力の定まつた時には一秒間に十間位の速力を有して飛び去るのである。

鳴の飛翔力としては鳥類の内では可なり早い方であるが今散彈の速力と鳴の飛翔力の差に依つて狙越を算出すると、鳴撃ちの散彈は八號乃至十號であることは既載の通りであるが十號の散彈は初速では三百五十米突でも、散彈の小さいだけに速力の減少も著しく二十間の處に達するには平均速力二百三十米突で時間は零秒一五四を要して居る其間に鳴は約八尺先を飛んで居ることになる故十間の處では三尺、二十間の處で八尺の狙越があつて鳴は散開圏内の中央に來て命中する譯である。

其發射する場合に於て二樣の說に分れて居る近撃をすること、射距離を延ばすことであるが、要するに早く狙つて遲く撃つと云ふことは射撃の極意であつて、其狙さへ定まれば强いて射距離を延ばす必要がない、殊に初心者が射距離を延ばすと云ふことは徒に射撃の機會を逸する許である故初心者にあつては鳴が飛び出した時には鳥を銃で突き殺す勢を以て鳥に擬して飛ぶ先を打つのである、其間に練習を積んで始めて、鳥の速力も解り、狙越も出來るので、初心者としては最も速に鳥に銃を擬することが肝要である。

鳴獵には獲物を拾ふと云ふことも一つの技術であつて、大に巧拙がある打ち落した場合に拾ひに行く前に先つて打ち落した處と自分の居つた處とをよく見覺へて置くのである、鳥が落ちた場所に居ればよいが、居ない時には其附近を一廻り搜索する猶見當らない時には周圍の畔を一週する、半矢になつた鳴は多くは畦に來て潜んで居る、猶發見しない時には始め打つた處に歸りて最も正當に見當を附けて再び搜索する、されば始めに打落したる處を最も正確に見當を附け置くことが狩獵家の常に心掛くべき事である。

普通の場合で見當を附けた處より手前に落ちて居ることは容易にない、多くは見當にして置いた草木より二三尺乃至一間位先に落ちて居るものである故其心得で探すのである。

續け打ちに二羽打ち落した場合に獵僕を使役する時は初矢は獵僕をして拾はしめ、二の矢は自身に拾ひに行くのである、之を二の矢まで獵僕に拾はしめんとする時は返つて見失ふことが多い、又獵僕を使役せざる時には初矢に打ち落したる鳥は最も正確に見當を附け置きて先づ二の矢より拾に行き拾つた時には先の打つた處に歸つて先に見當を附けたるを見定めて再び拾ひに行くのである。

初矢は二の矢を發つ爲に落ちた場所を見定める猶豫がないにしても二の

矢は落ちた所を見定めることが出來るので初矢を見失ふても二の矢は必ず發見するが、多くの狩獵家の中には初矢より拾ひに行つて初矢、二の矢共見失ふ場合が多い、之は初矢を捜して居る内に二の矢に落ちた見當を忘れて了ふ爲めである、見當の確實なるものより拾ふのが順當なるである。

鳥の保存法

鳴の初獵の頃は未だ陽氣が暖いので鳥が損じ易い鳥の保存法も心得て置くべきもの丶一である、鳥下げに澤山下げて置くのは一寸見よいものであるが、鳥は非常に損じ易いもので永く下げて置く可きものでない、始め打て落した時に半矢の鳥は脊骨を折つて殺し、胸を押して餌を吐き出させ、腹を押して糞を搾り出して鳥下げに下げ冷ゐて堅くなつた時に首を羽毛の間に挾んで脊負つて了ふ暖い鳥と冷めたい鳥と一緒にすると鳥は早く損ずる故之はしない方がよい、滯在して打つ時には其日打つた鳥は土間に并べて臼か盥を伏せて重しを置き猫鼠の害を防ぐ空氣の流通をよくする爲に少しく隙して置けば一日位は安全に持つ、宿屋に自慢して下げて置くのは鳥を惡くする許りである。

野に立つての注意

鴫打ちとして野に立つ時に於て注意を要するのは鴫の居る所は既記の如

く沼地若くは泥田で、其沼地泥田には深泥の所が多い、其深泥に陷ち入り焦せれば焦せる程深味に入り容易に上り難い場所が多い、斯の如き深泥の所には底の知れぬ深い所があつて、生命の危險な事もあれば充分に足許に注意して深味に陷らぬ様にすべきである。

山鷸獵の巻

山鷸は鳴の如く數は多くはないが獵鳥としては決して少ない數ではないが、殊に其味か美味なると形の大いのは好個の獵鳥として歡迎せらる其蕃殖地は鳴と同様に西比利亞の東部であつて、鳴と同じ様に廣く世界に分布して、歐洲に於ても好個の獵鳥としてある、秋になつて暖を追ふて北より南と飛び、春は暖に追はれて南より北へ歸り、我國に渡來するのは鳴より少しく後れて、早い時で十月の初獵頃に姿を見せることもあるが多くは十月二十日過ぎてからである、

獵期の始め頃に渡來して居る鳥は痩せて脂肪も乘つて居らないが、鳥類中で最も多食する鳥で我國に來て僅かに二三日にして全身に膏附き驚く許りに肥わて來る、其の北より南と暖を追ふて飛ぶのは夜間である、其餌啄をする時も多くは夜であつて山鷸も鳴と同じ樣に鷹を怖れて日中は薄暗き藪の中に潜んで居て夜になつて始めて活動を開始し終夜餌を漁り又南々と飛ぶのである、

山鷸の生活狀態

山鷸は字の如く山野に棲息して居るも雉、鶉とは全く異なつた生活をして居る、雉鶉の乾燥した處に居るに對して水に近き陰鬱の濕氣のある處に居る、其食物も雉鶉の穀類其他草木の實を常食として居るに對して鳴の如く小虫を常食として居るが、鳴は水中に發生する小虫を食して居るも山鷸は陰濕の地に發生する小虫蚯蚓殊に夜間にば田畑の緣の濕地の處に出でゝ鳴と同樣に蚯蚓等の小虫を餌啄して居る、之等の小虫の發生する所は富饒の地で濕氣のある彼の嘴が地中に入つて自由に餌を探し得る柔な場所、樹木の葉や草か堆つて腐敗して黑き柔き土の昆虫の發生する所であつて鹽分、酸分、鐵澁等のある處には居らない、

初獵近くまだ木葉の落ちない頃には晝間は松、檜、櫟、竹藪等の繁茂して地がヂメ〳〵した林の下に潜んで居つて夜間は附近の陰濕の地に出で

餌啄をする故陰濕の富饒の地に近い松、楢、楪、竹藪等を探し少し、秋
爛けては桑畑、竹林或は小な杉、松、林に移り、初冬漸く寒氣の強くなる
頃には海濱の小松林人家近くの竹藪下は濕地で日當りのよい處に移つて
居つて大なる森林、深山幽谷等には居らない、

山鷸獵の愉快

山鷸獵として愉快なのは獵期が短いが秋よりも春の歸り山鷸である春の
歸りは三月下旬より終獵期までゞある其期間は僅かに五六日に過ぎない
が秋の如く陰鬱な所でなく松、楢其他雜木林の下草の綺麗に刈り取られ
た芝生の如き足場のよい搜索に樂な處に棲息して居る殊に人心を唆る暖
い日を浴びながらの獵であるから最も愉快である。
秋の山鷸は平野と山地に關係がなく餌のある所には到る處に棲息して居
るも春の山鷸は平野に少なく山地に近い林の下若くは山の中に居つて春
と秋との違である。

山鷸の一度着いた所

又山鷸は一度着た處には必ず續いで着くもので一度捕つた所には翌日乃
至二三日置いて行つて見ると又必ず同じ樣に着いて居る、こうして一秋
の間は代る〳〵絶ねず着いて居るが之は其年許りでなく、其附近の狀態
が非常に變化しなければ年々同じ樣に着くものである、春の山鷸は時期

が短い故一度去れば其年は再び來ないが、翌年は前年と同じ樣に來るものである、一度發見した場所は年々同じ時期に必ず來る故記臆して搜して見る可きものである、

山鷸の飛翔力は比較的遲い鳥である故開豁した處を飛べば極く擊ちよい鳥である、雉、鷄雉と異なつて人の足響でも飛び出すも林の中を飛ぶので、射擊に困難である故、犬をして追はせて林の外に飛び出さしむるのがよい林の外に飛び出しても開豁の處は容易に飛ばない鳥で林に添ふて飛ぶ故、犬をして追はせて飛び出さしむる前に先づ其飛翔の方向を豫測して射擊に容易な場所を見定めるのが必要である、其飛翔力としては鶉と略ぼ同樣であれば二十間の距離の所では五六尺の狙越を要する譯である、又多くの鳥は半矢になれば匐ふて逃げて落ちた場所に居らないが此鳥は半矢になつて落ちれば其儘其處に竦んで居る故探しよい鳥である、

地鳴に玉鷸

他に鳴類としては地鳴、玉鷸の種類がある、地鳴、玉鷸は其數が極く少なく鳴鷸獵に時々發見する許りであつて獵として獨立して記す程のものではない其產地は地鳴は鳴鷸と同じく西比利亞の東部に蕃殖して內地には早きは八月の末より姿を顯して十月下旬には早くも南に飛んで多くは越年しない來春も遲れて歸つて來て終獵期頃に漸く見るのである、

玉鴫は內地に蕃殖して冬期も越年して四季を通じて棲息して四月は早く交尾して蕃殖するが其數が極く少ないので獵の趣味として記す程の事はない。

獵犬の巻

獵犬としてはポインター、セッター、スパニール、レトリバーと其他種々ある、ポインターにも亦英國種、獨逸種、露西亞、又セッターにもアイリス、英セッター、ゴルテン種と種類を擧げ來たれば決して少なくないと共に其種類に依つて又特殊の長所を有して居る、之を一々說明することは斯かる一冊子によくす可きことでない、此茲には單に獵犬としての使用法を記すことに止めて擱く、

雉鶉雉の獵としての生命は犬であつて獵犬に離れては盲目が杖を失つた

如く獵は全然不可能である雉鷄雉の居る處を熟知して居つても犬の力を藉らなければ雉を追ひ出す事とが出事ないので狩獵家は暗夜に燈火を欲すると同樣切つに良犬の必要を感じて來るのである獵犬としては前記の如く種類は少くないが雉、鷄雉獵の犬としては普通ポインターにセッターである、

ポインターとセッター

ポインター、セッターは先天的の獵犬である、犬の嗅覺の非常に鋭敏なるは本能であるが殊にポインター、セッターは鳥の臭を嗅ぐことに於て先天的の技能を有して居る澤山の臭の中よりよく鳥の臭を識別して其の臭の跡を辿ることの巧なる全く彼は獵犬として生れ來たのである彼は其の臭を辿つて鳥を搜し獲物を發見すればポイント又はセットとして、鳥の居ることを人に知らせる人は彼の働きに依つて獵を行ふので吾人は彼に感謝しなければならんのである、

獵としては犬に期待することが最も多い從つて搜索が下手であるか或は其の報告が不完全であり、又は主人が充分に射擊の準備をせざる間に鳥を追ひ出したり若くは主人の命令を嚴守しなかつたりする犬では終極の勝利は覺束ない、狩獵の鍵は確に犬が握つて居るので狩獵家の犬に苦心するのも無理のないことである、

一部の人には藝さへ出來れば形や系統などは敢て問ふ所でないと唱へて居る人もあるが之は痩我慢である、獵を趣味のものとしたなら犬にも趣味を持たなければならんのである形のよい系統の純粋を望むと云ふことは趣味から起る自然の傾向であると共に獵犬が自然に先天的の技能を有するとすれば其の系統を擇ぶのも亦必要である然し此茲には單に技能を主として記して置く。

獵犬の資格

獵犬の用途に就ては山地に平野、水邊、寒國と使用の異なるに從ひ、犬の種類も異なつて來る、概して云ふと山と平野の獵には短毛種水邊と寒國には長毛種と自然に其形に依つて用途は異なつて來るが、其訓練の方法に依つて何れにも使用せらるゝのである、獵犬としての資格は、

一獲物を發見して報告すること、

一落ちた獲物を銜へ來ること、

此の二つで之さい出來れば立派に獵犬の資格がある、獲物を發見して報告することは鋭敏なる鼻に依つて、獲物の歩いた跡を嗅ぎ臭を辿つて獲物の居る處を突き止めて報告するのである、之には嗅覺の最も發達した犬を要することは勿論であるが其搜索の巧と不巧とは嗅覺の働き許りでなく犬の克明に搜す忍耐力と、獲物の居る處とを直覺的に感知する先

天的の技能とに依るのである、で獲物を捜索して報告することは殆んど先天的に屬して居ると云ふてもよい、又運搬することも先天的に巧の物も居るが又獲物の落ちた所に行つても決して銜ない物も居る、又最も巧なる犬になると獲物が彈に當つて落つるのを見て、半矢になつても落ることなしに飛び去つたか、乃至は落ちたかを人以上に知覺して獲物を拾ひに行くのもあるが之は其犬の特質に屬して居て教育では出來ないが、普通落ちた獲物を拾つて來ることは教育に依つて充分に出來る、

獵犬として無資格

或る狩獵家は捜索と報告と追出すことは獵犬の先天的の技能であつて之は訓練で出來るものでない、よし訓練で出來ても訓練と實地とは異なつて應用さるゝものではない之は一種の理想である英國等の整然たる獵區にあつては應用せらるゝかも知れないが我國の如き千差万態の獵場にあつては其訓練の活用は出來るものでない、從つて之等の技能のない、犬は獵犬としての資格はない、銜て持つて來ることは型に嵌つた事である故訓練によつては自由に出來るが先天的の性は多少の不完全の處を保助教育を加へて完全ならしむる位のことが出來るが、先天的に其性質を欠いて居る犬は教育を施しても無効であると主張されてある

右の説に對して一方には犬の嗅覺さへ完全に發達して居れば捜索報告、追出す等のことは自由に敎育することが出來ると主張する人がある、其の説は獵犬として云ふときは先天的に出來る物に增したことはないが嗅覺が發達して居つても、捜索することをしない犬を訓練するには先づ其犬の嗜好する處の食物を犬に充分に嗅がせて後、其食物の臭を地上に殘す爲に地に摺り附けながら多少離れた處に隱して置くと犬は嗜好の慾望を充す爲に臭を追ふて食物を探して行く、最初は之も餘り遠い處では犬は探し倦くむ故、極く見附け易い處に置いて犬に探すの娯を會得させる斯くして次第に距離を遠くし、又探し難くして探せて、捜索上の忍耐

力を養成すると共に其智識を與へるのである充分に探すことが出來る樣になればポイント若くはセットすることを敎育する、隱し置いた場所近くに犬が來ると強い臭が鼻を突くので勇んで飛び込んで探し出さうとした所を一寸止めて直によしと聲を掛けて食物を探し出さしめるのである始は隱した場所に行つた時には一度は必ず止まる習慣を附ける次て聲をかけて飛び込むことを敎へ之も出來れば主人の許可の出る迄は待つことを慣すのである、

斯くして充分に探すことを敎へた後他の馴れた犬と一緒に二三回も連れて行けば充分に働く樣になるとのことである、

犬は直ぐ習慣の附き易い動物である故此の方法でも或は出來ないとも限らない一度は試驗して見可きものてある。

獲物の運搬

犬の銜へて來ることを敎へるのは搜索を敎へるよりも容易である、犬に物を投ずれば嬉んで銜ひて來る、之は銜ひて來ることの第一歩である、棒や其他の物を銜ひても、落ちた鳥には温味があるのと、銜ひれば毛がボサ〳〵するので氣味惡るがつて銜ない犬が多い、之等の犬には先天的銜ひると云ふ性質があるので比較的敎育は容易である獲物の落ち塲所に行つて無理に銜ひさせる、咥ひなければ無理に口に押し込んで遣る手を

放せば犬は口を開いて獲物を落す、夫を又入れて口を閉いで遣る、こうして强制的に遣れば犬は自然に銜ひる樣になる、

又始めより銜ひない犬に對しては今の樣にして銜ひさせてもよいが又最初に肉を與て肉の臭と味とを充分に覺ひさせ次に肉を糸で緊束して投つて遣る犬は肉の味を嗅て直に銜る其の銜ひるを見、糸を引いて手元へ寄せて別に肉を與へて今銜ひて居る肉は放させて又投る、こうして銜る習慣が附けば今度は肉に鳥の羽根を括り附けて投る、犬は肉の臭があるので、始めは銜ひるが毛が邪魔になつて放す犬が多い、之には先に記した通りに無理に銜ひさせる、こうして銜る樣になつても落ちた鳥は又銜ひ

ない其の時には又獲物の落ちた所に直に行つて無理に銜ひさせる、
銜ひても運んで來ない犬には銜ひた物に糸を着け之を手繰る、手元に來れば犬の嗜好する物を與て放させる、
獲物の落つるのも見て駈け出さない犬には犬の嗜好する物を投つて敎へ、又は獲物の落るのを見て犬を連れて共に駈け出すと遂には落るのを見ると駈け出す樣になる、

齒の固い犬

齒の固い犬に對しては銜ひさせる物の中に初は先の鈍い物を入れて强く噛めば口中に痛を感ずる樣にして次第に先の尖がつた物を入れて銜ひさ

せれば、柔く噛む樣になるのである、犬は凡て訓練に依つてどうにもなるものであるが其の訓練に際して氣永に熱心にすることが肝心である、殊に習慣の附た犬に對しては强制が度に過ぎる時は犬を畏怖せしめて返つて害ふことがある、充分に氣永にする時には大抵の犬は苦心の効があるもの故充分に敎育して見可きものである、

銃聲を恐怖する犬

犬には非常に銃聲を恐怖するのがある、獲物を搜しても發射せんとする時には遙かに一二丁も隔つた處に逃げて行くのがある、甚しき物になると銃を見ると直ぐ逃げ出すのもある、仔犬の時より銃聲を聞かせて馴せ

ば銃聲を恐怖する樣なことがないが時には誤まつて彈丸を浴びせた爲めに銃を非常に恐怖するものがある銃、銃聲を恐怖する犬には銃、銃聲に對して安心を與へるのが最上である、夫には逃走の出來ない樣繫いだ儘傍で發射して銃、銃聲が何等の危害を與へないことを會得せしむるのである、犬を繫で發射すれば始めは銃聲を聞く毎に非常に狂ふが後には觀念して靜止する樣になるこうして始めて、銃聲を聞いても危害のないことを知覺して銃、銃聲に恐怖することがなく、安心して居る樣になる、

犬の系統と遺傳

遺傳は凡ての動物にあるが、犬程形態より性質まで確然と顯はれて來る物は少ない、前にも獵犬は先天的の物であると記した如く搜索、運搬等先天的に親より子、子より孫と傳はつて未だ曾て敎へたことのない犬でも野に出れば直に臭を嗅ひて搜し廻はる、物を投すれば直ぐ銜ひて來る、之は獵犬としての遺傳であつて他の犬に通有性の遺傳なでい、他の犬に通有性でないだけに獵犬に對しての系統は擇ばなければならんのである、親犬がよい程、生れた子はよい、名犬の子には受合つて名犬が生れる、性質は確然と親より子と遺傳する其遺傳するのは性質許りでなく形より色合までも直系的に子に顯はれて來る、搜すことの下手な犬の子は搜すことが必ず下手である、齒の固い犬には必ず齒の固い犬が生れる又

形では腦骨の尖つた犬には又尖つたのが生れる、耳に茶斑があれば子にも耳に茶斑がある、犬には親に似ぬ鬼子が滅多に生れない必ず正確に遺傳が顯はれて來る故犬を撰擇する場合には先づ第一に其系統を知ることが肝要である獵に趣味を有する以上は犬にも趣味を持つことの當然であることは前に記した通りで其の系統的性質を知ると共に形態の系統を知ることも犬に趣味を持つ以上には必ず起る問題である、

主人の勞と犬の活動

犬に依つては藪に入れても直に出て歸つて來て主人の居る近傍しか搜さないのが居る、斯かる犬は廣い場所を搜せんとするには勢ひ主人公は廣く先に立つて歩いて犬をして搜させなければならないが、之は狩獵家としては疲が早く來て非常に損んである、主人は犬の擧動を監守し得る處に居つて犬の活動を見て居る、犬は臭を辿て廣く大く搜し廻つて獲物を發見すればポイント、セットをして發見を報告し主人の來るのを待つて居る、斯くして始めて充分に犬の使役の効を見るのである、

命令の遵守

又犬が搜し廻る時でも勝手にさすることは斷じて不可である、主人の命は如何なることでも聞くと云ふ性質を馴致することが肝要である、犬が搜し廻つて居る時でも呼笛を吹けば直に戻つて來、右を指せば、右に行

き、左を指せば左に行く様にすることは最も必要である、之は種類と系統にも大なる關係あるが、犬の訓練の巧拙は大に預つて力がある、

犬の訓練と心理狀態

犬を訓練するに附て最も必要なる犬の心理狀態に就て少しく記して見よう、

犬の活動は何故に起るかと云ふ問に對して著者は嗜好の慾望が遂には一種の習慣になつて動くものであると答ふ、人は良心の發動に依つて活動するものであるが、犬には良心がない、凡ては慾望の支配と習慣に基くものである鳥の落つるのを見て銜ひて來る、之は鳥が落れば銜ひて來る

と云ふ習慣の働きである、先に記した如く捜さない犬でも嗜好を滿す望で始は動いたが後には之が習慣で動くことになる、で獵犬の教育は慾望を基礎として習慣を造りさへすれば愛撫でも强制でも敢て向ふ所ではない强制も過ぐれば犬をして其人を恐怖せしむるに至つて充分の活動を妨ぐることになる又愛撫すれば慣れて主人の命令を聞かぬと云ふ人もあるが之も誤りである主人の心を讀んで主人の命令を聞かなくなつたのではなく其教育が愛に流れたので充分に其習慣を嚴守することをしなかつた結果であつて、犬を教育するには彼の慾望を活用して習慣を造るにあ

る、で習慣を嚴守すると云ふことは犬を使役する上に就て最も大切であ

る、

動物には識別心がない犬自身が行ふたことに對して善惡の識別なく一度行ふたことは續いで行ふとする習慣性が直に顯はれて來る、夫れと共に愛撫を加へて來た犬でも一度强く畏怖せしむれば其畏怖心が其人に對する習慣となつて其人に寄り附かなくなる、又强制的に訓練して來た犬でも犬には强制とは感じて居ない、之が通例と思ふて居つて其人に對し別に畏怖心も有して居らない、從つて愛撫を加へても愛撫と感じない、犬を訓練する場合に假令て見ると銜ひて來た物を放さない犬がある、之を放しむるに鞭韃を加へても或は口を割つても、又は犬の最も嗜好する處の物を與へて放す事を敎へても、歸する所は同一である習慣が附きさへ

すれば必ず放すことになる、又犬が勝手に活動しやうとするものでなく人が習慣と命令を與へないから勝手に動くのである、習慣と命令とを與へて置けば必ず其通りに働くもので、其命令通りに働いても犬は自由を束縛されたとは思ふて居らない夫れが自然と心得ゐて居つて決して不自由と思はない常に粗食を與へても不滿を訴へなければ又美食を與へても滿足もしても居らない夫れが當り前と思ふて居るだけである要するに訓練は習慣を附けるにあれば習慣が附きさへすれば、訓練は强制でも愛撫でもなんでもよい歸着する處は同一の結果である一度附けた習慣は必ず守らす可きものである。

雉ど鳴獵法（終）

大正五年十一月廿五日印刷
大正五年十一月廿八日發行

定價金五拾錢

著者兼發行人　東京市京橋區三十間堀二丁目九番地　吉澤寛夫
印刷人　東京市本所區横綱町一丁目十六番地　有我本次郎
印刷所　東京市本所區横綱町一丁目十六番地　根岸清美堂
發行所　東京市京橋區三十間堀二丁目九番地　獵ど漁社

不許複製

賣捌所
東京市京橋區鎗屋町一番地　大倉組銃砲店

内外銃砲火藥猟具類

營業品目

各種新着
（正價表進呈）

英、二連獵銃……空氣銃具
米、自働拳銃……獵具
米、二連獵銃……獵具
米、單身銃……獵具
獨、二連獵銃
獨、空氣銃
白、自働五連獵銃
大倉製獵銃

大倉組銃砲店
東京市京橋鎗屋町電話京橋二〇二八

吉澤寛夫著
金魚のかひかた
好評嘖々版を重ねる五回
定價拾五錢

吉澤寛夫著
鶯のしほり
鶯飼育の一般
定價拾五錢

吉澤寛夫著
うぐひす
鶯の啼聲の研究
定價五拾錢

吉澤寛夫著
收益ある鶉の飼育
近刊

東京市京橋區三十間堀二丁目九十九
獵と漁社發行

十二月色紙會

犬入
猫院
専隨
門意

本郷區湯島新花町八十六
湯島家畜病院
中里利平
電下四六三九

小石川區竹早町廿一（電車停留場前）
湯島家畜病院分院

主意書

總ての物を形からでなく靈から描き出さうとする萬氏の作品は藝術として求むるところの第一は既に備つてゐる、氏の作品を見るところの色彩は生きた氏の血てうの筆觸が肉である可く努力し、その描かれたる畫面全體が生き物である事を願つてゐる氣がする、氏は實に眞摯にして才分豐かな畫家である、

氏は今や意を專らにして大作に從事せんとしてゐるが幸に予等の懇請を容れ餘暇を割きてこの畫會を起してその折々の感興になる色紙を頒つ事にした同好の士は來つてこの企てに一助を與へ給へよ、切に願ふ、

大正五年十一月　發起人　川俣春人　清浦青島　吉澤寛夫　中尾未承

規定

■萬鐵五郎氏が折々其感境を描きたる色紙を毎月一枚づゝ配付し十二ヶ月間繼續するものとす但し配付は入會の翌月より始む

■會員は入會の翌月より毎月十日迄に金壹圓づゝ拂込むものとす

■入會の際申込金五拾錢を拂込み置き最後の月は差引き金五拾錢を拂込む事とす

■拂込の方法は會員の隨意なれども希望者には特に集金郵便にて請求すべし

申込所　東京市小石川區西原町一丁目八番地　萬鐵五郎畫會事務所

色紙に就て

色紙といふものが、大分室内裝飾品として珍重せられるやうな傾向が見えて來ました、それが洋畫家の手によつて開拓せられつゝあるといふことは、面白いことだと思ひます、單純な和歌俳句の外に、一種の風致を具へて、新しい時代の心持を巧みに表はした洋畫家の色紙には、又何ともかへない懷しみがあります、かうした小さい方面からでも、今の多忙な人々が新しい藝術の一端を理解することが出來るようになれば、それは非常な欣ばしい事だといはなければなりません、軸物などゝは違つて、時々に取替へるにしても、面倒のない、而して安直な色紙はどんな家庭にでも備へて置くには適はしいものであります、十二枚もあれば、月々に新しいものと入替へて一年樂しむことが出來る、私は色紙が益々世の中に行はれて來る事を希望します

――未承――

十二月色紙會申込書

一　口

貴會ノ主意ヲ賛シ入會ヲ申込候也

大正五年　月　日

住所

氏名

拂込方法　郵便爲替
集金郵便

16

339
835